

「まあ入れ、もう夜になつたきに、探すこともできまい、明日探すがよから、内へ入れ」
信義は明日にでもなつたら少年の伴れが少年を探しに来るだらうから、それまで己の處へ置いてやらうと思つた。

「内へ入れ」

少年は云ふなりに入つて來さうにするので、信義は體を退いて前に立つて歩いた。少年はそのそと跟いて來た。土間の口には燈が明るかつた。信義は其處から入つて往つた。

「おい、へんどの子を泊めてやるぞ」

そこには女房や女達が夕飯の準備で忙しうにしてゐた。信義は其の一人に云ひつけて、少年の菅笠を脱らし、裏口へ伴れて往つて手足を洗はした。信義は其の一方で少年の伴れが探しに來たなら判るやうに、部落の入口になつた其の人たちの立ち寄るに便利の好いやうな家へ使をやつて、もし少年を探しに來た者があるなら知らしてやつてくれと云はして來た。

信義はそれから少年を座敷へあけて、行燈の傍へ坐らせた。

「お主は、何と云ふ處の者ぢや、村の名を知つちよるか」

少年はきよとんとして信義の顔を見た。信義はふとかうした少年に村の名を訊くのは無理であると思つた。そこで名を訊かうと思つて口を開けようとしたところで、首からはづして傍に置かしてある

細袂に眼が往つた。細袂には日本徳太郎と書いてあつた。信義はそこで、

「お主は、徳と云ふのか」

と、云ふと少年は急に領づいて、

「白川」

と轉かつて出たやうに云つた。

「白川か」

信義は少年に曳きずられるやうにして云つたが、さて考へてみると白川とは苗字らしいが、日本と明確に書いてあるところを見ると苗字でもないらしい。苗字でないとするとならう、さう思つて少年の顔を見てゐるうちに、處の名ではないかと思ひだした。

「お父の名は何と云ふ名ぢや」

少年はきよとんとして何も云はなかつた。信義はふと巡禮の菅笠には、それぞれ生國の名を阿州とか讃州とか書いてあるのを思ひだした。

「おい、其の笠を持つて來て見よ」

と、云つて家の人に少年の冠つてゐた菅笠を持つて來さして見たが、それには何も書いてなかつた。

「處の名も判らない、親の名も判らない日本徳太郎か、まあまあ、明日になったら何人か伴れが探しに来るだらう、飯を喫はして何處かへ寝かしてやれ」

日本徳太郎と細挾に書いてあつた少年は、翌日になつても其の翌日になつても、まだ其の翌日になつても伴れの者が迎ひに来なかつた。信義は隣村の者にまで頼んで少年の伴れを探さしたが、どうしても判らなかつた。

お父もお母もあると云つた少年の詞によつても、伴れはどうしても兩親らしいので、巡禮かかうした山の中へ来るのは不思議であるとは思ひながら、少年の兩親を探してやつてみた信義も、どうして少年を迎ひに来る者がないし、送つて往つてやらうにも處が判らないので、たうとう己の家へ置くことにしたが、日本と云ふ苗字が何たかへんであるから、少年が口にした白川を苗字にして白川徳吉と名乗らせることにした。

白川徳吉の少年は慣れて來るとぼつぼつものを云ひだしたが、其のアクセントは伊豫でも土佐でもなかつた。少年は芝家お家族の一員となつて、小學校にも通ふやうになつた。そして、小學校が終ると芝家の家業を手傳ふことになり、小遣として幾千の金を給せられることになつた。少年は正直で柔順であつたがために、芝家の者からも村の人からも愛せられた。しかし、其の愛せられる奥には厭

ものがひそんでゐた。

「へんどの迷ひ兒ぢやが、感心な男ぢや」

少年は村の人の眼がかう云つてゐるのを悟るやうになつた。少年は十七になつてすこし貯金が出来たので、それを資本にして獨立の生計を立てようと思つて、信義の許可を得て伊豫の宇和島へ行き、其處で魚屋をはじめた。

正直で柔順な少年魚屋は、其處でも人の同情を惹いて商賣も繁昌し、數年の後には店も次第に大きくなつて、妻室がなくては不便になつて來たので、土地の女と結婚したところで、女に醜い事件が起つた。徳吉は女を離縁するとともに、其の土地が厭になつて家を疊んだが、他に往く處もないので十川村へ歸つて來た。

徳吉は十川村へ歸ることは懐かしくもあれば、何處かに重苦しいところもあつた。

村の人は同情の眼で徳吉を見た。徳吉は其の村の人の同情の眼の前で再び魚屋をはじめた。

魚屋はまた繁昌した。金も次第に出來、二度目の妻室も出來、家も出來、村の有志の仲間入りもできるやうになつた。他處目には徳吉はもう他に何の不足もない幸福其の物のやうに見えたが、其の實彼は非常に不幸な人であつた。

「へんどの迷ひ兒ぢやが、感心な男ぢや」

徳吉は少年の時から感じてゐる村の人の眼の中にある侮蔑をどうかして消したかつた。それには己の素性を明にしなくてはならなかつた。徳吉は信義から時どき詞の詛が土佐でも伊豫でもなかつたと云はれてゐる詞を思ひだして考へてみたが、とても判るはずのものでなかつた。徳吉は其の時もう三十七になつてゐた。壯い時にはそれほどなかつたが、金も出来、家も出来、有志の仲間入りまでして立派な一家の主人となるに従つて、己の素性が判らないために、何事にも他人に一目を置かなくてはならなかつた。其のうへ、親しい者が徳吉のことを褒めでもすると、女房は謙遜の意味かは判らないが、

「何處の馬の骨やら判るものかよ」

などと云つて笑つた。それは徳吉には堪へられない侮蔑の詞であつた。彼はなんとかして己の素性を知りたいと思つたが、其の素性を探ぐる手がかりになる物は何もものもなかつた。ただ在ると云へば詞の詛が土佐でも伊豫でもなかつたと云ふ信義の詞があるばかりであつた。

徳吉は非常に恒壽になつた。彼は店にゐても黙りこんで考へてゐた。

「人が来ちよるぢやないか、何をうつかりしよるぜよ」

彼は時をりかう云つて女房から叱られた。

「をかしいよ、此の人は、何をそんなに考へだしたらう」

魚の料理をしてゐて考へ込んで女房に叱られることがあつた。さうして考へてゐる徳吉の感情に、某日、山坂を歩き、石ころ路を歩き、砂灘を歩き、小川の櫓を渡つたやうな、遠い遠い昔小さな足で踏んだと思はれる路の感じが薄すらと浮んで来た。

土佐でも伊豫でもない詞の詛、讃岐か阿波か、伊豫も讃岐へ寄つた方か、それとも土佐でも高知から東の方か、徳吉はまた何時も考へるやうに當途もなしに生國の見當をつけようとははじめたが、土佐でも伊豫でもないと云ふ漢とした詞以外に見當をつける何等の材料がなかつた。

「おい白川、早う切つてくれんか、家ぢや客が待ちかねよるが」

魚軒を買ひに来て徳吉のこしらへるのを待つてゐる村の男は、こんなことを云つてせきたてることがあつた。

山坂を歩き石ころ路を歩いた何時かの感じが、また感情の中に蘇生つて来た。其の蘇生つて来た感じよりは色が濃かつた。徳吉は其の感じをちつと見てみた。山坂路は茶店とつながり、菓子を買ふ店とつながり、お寺の仁王門とつながり、線香の煙とつながつて来た。山坂路の右手には碧い廣い廣い海がつながつて来た。

其の海の水は眼の下に大きな獣が群がつかつてゐるやうに見える眞黒な岩にぶつつかつて白く四方に飛び散つてゐた。そこには其の波の碎片のやうな鶏が群をなして飛んでゐた。沖の方には夕陽の光のたれたらと流れた處に大きな船が二本の煙突から煙を吐いて浮んでゐた。其の海を見てゐる山の上には芝草のやうな笹が生えてゐた。其の笹をなぶるやうに踏んで歩いた小さな足の感觸が海の水といつしよに感じられて來た。

海の見える路は石ころ路につながつて來た。門口には、繩の絲を入れた鉢を置き、編を置き、櫛を置いてある人家がそれにつながつて來た。

「なむ、だいし、へんせう、こんがう……」
其の人家の門口に立つて覺束ない聲で奉謝を乞うた少年の巡禮の姿がちらちらと動いた。それは己の姿のやうにも感じられるれば、また他の少年の姿のやうにも感じられた。徳吉は其の少年の姿をはつきり見ようとしたが、すぐ消えてしまつた。

稲田の稻を刈りかけてゐた何の田にも人が動いてゐたやうな感じが浮んで來た。田の畦には馬がゐて其の刈つた稲束を積まれてゐる處もあつた。稲田の間路は河原の路とつながつて來た。

小川の橋があつて下には澄んだ水が流れ、魚であらう、小さな泡をこしらへてゐたやうな感じがあらはれて來た。

小川の橋から續いて路は山坂路とつながつて來た。

仁王門、石段、線香の煙。

「おまん、此處にあつた錢をしまふたけよ、二十錢あつた」

女の呟鳴るやうな聲にびつくりして徳吉は顔をあげた。彼は店に腰をかけて煙草を喫み喫み考へてゐたところであつた。

「二十錢がどうしたら」

徳吉は意味が判らないので訊きかへした。

「今、鯉の干物を賣つた錢よ、しまふたけよ」

女房は店頭の上の指をさした。

「おらはしまほんぞ」

「そんならまた窃られた、今、子供が此處でうろつきよつた、何をうつかりしよるぜ、なんぼ商賣をしたち、窃まれちやなにもならんぢやないか」

「うん」

「うんぢやないよ、困るぢやないか」

「よし」

「ほんまに、此の人は、なにをばやばやしちよるぢやらう」

土佐でもない伊豫でもないとするれば、阿波か讃岐か、徳吉の感情には、海の水が右から顔を出す十八箇所の路が煙のやうにもやもやと浮んで来て、山坂があらはれ、寺があらはれ、石ころ路があらはれ、畑があらはれ、人通りの多い市街があらはれ、人家の點在する村落があらはれ、煙突のある船の通る海があらはれ、波の静かな入江があらはれ、漁師町があらはれ、大川の渡船があらはれて、それがつながつたり切れたりした。

「早う飲うだらええぢやないか、二合位の酒を、何時間かかつて飲むつもりぜよ」

徳吉は夕飯の膳さきを一本飲んでゐた。彼は女房の聲で口の縁へ持つて往つた盃を控へた。

「まあ、さう云ふな」

「さう云ふなち、二合位の酒を何時間かかつて飲むつもりだよ、跡がかたづかんぢやないか」

「おらは放つておいて、お主や、早う飯を喫へ」

「飯はとうから喫ひましたよ」

「飯がすんだら云ふことはないぢやないか」

「それでも跡がかたづかんきに困る、早うつつと飲うで飯を喫ておほせ」

「やかましい」徳吉は腹をたてた。

「云ひやうがなうなると、すぐにそれぢや、早う飯を喫ひ」

「やかましい、阿房」

「阿房でもええ、お前はなんぜよ、えらさうなことを云ふが、生れた處も知れん、親もない迷ひ兒ぢやないか、わたしのやうないかずの阿房なれやこそ、妻室になつちよるが、他の人が、何處の馬の骨か、牛の骨か判らん者の妻室になるぜよ」

「なにぬかしや」

徳吉は盃を女房の口を覗つて投げつけたが、盃はそれ後後の襖に當つた。徳吉は續いて膳を女房の方へ向けて突き飛ばした。膳はひっくりかへつて銚子や皿が飛んだ。其の怒に燃えた徳吉の頭へ参詣人の群がつてゐる大きな社がちらちらと閃いた。

女房は驚いて起ちあがつてゐた。徳吉は其の大きな社の感じを動かすまいとして女房の方には眼もくれなかつた。社はなんとなく親しみのある社のやうな氣がした。徳吉は其の社はどうした社であらうかと考へた。

其の大きな社はどうしても己が遊んで見なれてゐる社のやうな親しみを持つてゐた。拜殿、廻廊、勾欄、其の大きな社の庭前も見えるやうな氣がして來た。

十佐でもない伊豫でもない詞の詛、ついすると其處は讃岐で、社は讃岐の琴平神社ではあまいかと
思ひだした。

參詣の群がつてゐる大きな社、其の社は時間が経つに従つて、簷の彫刻、丹塗の柱、柱の破れ目、
敷板の窪み、さうした物がちらちらとするやうになつた。

徳吉は三四日それを考へてゐた。大きな社の近くにある細民の人家のごたごたと並んでゐる村の通
路がそれにつらなるやうになつた。

徳吉は其の翌日、商用で伊豫の方へ往つて來ると云つて出發した。それは大正六年のことであつ
た。徳吉は琴平神社を中心にして、三十年前行方不明になつた少年の家族の在るか無いかを探る
ためであつた。

徳吉はまづ伊豫から巡禮路を琴平のはうへ往つた。そして、時間をかまはずに其處此處に泊つて、
老人を見かけると三十年前に子供のゐなくなつた家はないかと云つて訊いた。

徳吉の足は自然と琴平の町へ入つた。町へ入つた時は夕方であつたが、彼はすぐ其の足で琴平神社
へ往つた。物を賣る店にも社を並べた旅館にも覺えはなかつた。

長い賽路、鳥居、磐石、往來する參詣人、水戸、境内の樹木、大きな社の建築物、丹塗の輝き、太

い柱、拜殿の簷の彫刻、廻廊、勾欄。それ等にもべつに見覚えはなかつた。ただ其のあたりの光景が
昔見た光景の様で親しみがあつた。

草鞋に踏みしめてゐる土には温かみがあつた。徳吉は何處かに見覚えはないかと思つて歩いてゐるう
ちに暗くなつて來た。彼は社の前の旅館に一泊して、翌朝再び社へ往き、其の周囲を見い見い歩い
た。

社にも木にも石にも見覚えはないが、其の周囲の光景はどうしても初めて見る光景ではなかつた。
どうしても此處へは昔來たやうな氣がすると徳吉は思つた。彼はとにかく琴平神社を中心にして、三
十年前に少年を失つてゐる家族を探してみようと決心した。

徳吉は琴平神社を出て足の向くままに歩いた。そして、老人を見かけると、
「もし、もし、すこし、めうなことを訊きますが、今から三十年ほど前に、六つか七つ位の男の子が
をらんやうになつた家はありますか」

と云つて訊いた。そして、二人訊き、五人聞き、十人あまりも訊いた時には、彼はもう琴平の町を
出て其の隣村へ往つてゐた。そこは觀音寺村であつたが徳吉には判らなかつた。

其處は小さな人家のごたごたと並んだ通路であつた。徳吉は其處でもまた老人を見かけると訊いて
みた。

「さあ、三十年前に子供がをらんやうになつた、さあと、わしは、そんなことは聞いてをらんよ」
 老人達の答へは多くかうした答へであつた。しかし、殆んど一身を投げてかかつてゐる徳吉はそんなことでは力を落さなかつた。小さな人家のごたごた並んだ處を出はづれたとこで、腰のひどく曲つた老人が來かかつた。

「もし、もし、すこし、めうなことを訊きますが、此の邊に、三十年前、六つか七つの子供のをらんやうになつた家はありますか」

老人はやつとこさと足をとめた。

「なに、三十年位前に、子供がをらんやうになつた、と、待てよ、それは村長ぢや、村長さんの家へ住れば判る、そんなことがあつたやうだよ」

徳吉は狂人のやうにして叫んだ。

「ありますか、ありますか、子供のをらんやうになつた家か」

「どうもあつたやうぢや、村長さんの家へ住けば判る」

「どうぞ伴れていつかあされませ」

「それぢや往かう」

老人は其處にある道分になつた路を右に折れて往つた。老人は荷物を背負はした馬のやうに腰をば

こぼこさしながら歩くので、徳吉はまどろこしくてしかたがなかつた。

黒板塀の古い板塀をめぐらした家へ來た。

「此處が村長さんの家ぢや、入つて訊いてみるがいい」

老人はさう云つてから腰をばこぼこさしながら往つてしまつた。徳吉は老人に禮を云ふのももとかしやうにして入つて往つた。

「私は高知縣から來たものでございますが、今人に訊いて來ました。お前さんの知つてをる處に、三十年位昔、六つか七つになる子供がをらんやうになつたことはございますまいか」

玄關に現はれた眼鏡の老人は徳吉の顔をじろりと見た。

「そんなこともあつたにはあつたが、其の兒はもう死んでをる、お前さんは、それを詮索して、どうするつもりですか」

「私は三十年前に、迷ひ兒になつて土佐へ往つて、土佐の人の世話になつて成育つたものでございませす」

「お前さんの名は」

「私は白川徳吉と云ひますが、私の經緯には日本徳太郎と書いてあつたと聞いてをります」

「いや、私の知つてをる子供はそんな名ぢやない、名が違ふが、もう位牌になつてをる、見せてあげ

よう」

さう云つて眼鏡の老人は引込んで往つたが、すぐ古ぼけた位牌を持つて来た。

「これは、私の弟の子供ちやが、七つの年にをらんやうになつた」

「其の子供さんは、そんなら、何處かで死んでをりましたか」

「いや、死んだ處は判らんが、裏の山で遊んでをつて、をらんやうになつたから、何處か川の中か、谷の中へ入つて死んだものであらう、それはもう定まつてをる」

其處へ老婆も顔をだした。そして三人で話してゐるうちに事情が明になつた。

村長は徳吉の伯父で、徳吉は村長の弟の兒であつた。そして、姓はやはり白川であつたが、名は福次で徳吉ではなかつた。徳吉の福次は裏の山であそんでゐなくなつたので、兩親は兒を探して七年間も四國巡禮に出、土佐へも七回往つてゐるが僻遠の土地にゐたため巡りあふこともできないうへに、其の兩親は昨年になつて相次いで病死した。

前後の事情から押して徳吉の福次は巡禮に誘拐せられて往つて捨てられたものであつた。福次は兩親の死は悲しかつたが、己が世人から侮蔑せられてゐる非人乞食でなしに名家の兒であつたのを知つて、女房をはじめ己を陰で侮蔑してゐる村の人びとに一種の復讐ができると思つて嬉しかつた。

數日の後、福次は戸籍謄本を持つて讃岐を出發して土佐へ歸り、十川村の己の家へ入るなり、出迎

へた女房はじめ集まつてゐる村の人の前へ戸籍謄本をほり出して、

「あつしは、非人でも乞食でもなかつた」と、云ふなり大きな聲で泣きだした。

此の話は十川村長芝榮二郎氏の談話として、當時幡多郡中村町に發行してゐた新聞に出てゐたものである。芝村長の談話の中には、「私共が此の告白を聞いた時は、云ふ當人よりも他の我我が泣きました」と云ふ文句があつた。

四國巡禮記

四國八十八箇所の靈場は、阿波には二十三箇所、土佐に十六箇所、伊豫に二十六箇所、讃岐に二十箇所あつて、阿波の靈山寺が一番の納經所になつてゐる。

天保五年二月、歌吉の養母は十一になる歌吉と實子の三つになる男の子を伴つて四國遍路に出た。

そこは土佐國幡多郡上の土居村であつた。暖かな南の國でも二月では寒かつた。其のうへ養母には傷寒の病があつたので一人身でも旅は苦しかつた。其の苦しみに加へて實子を背にして往く苦しみがあつた。しかし養母には此の三重の苦しみを苦しんでも、遍路に出なくてはならないより以上の苦しみがあつた。それは其のまま家にをれば親子三人が餓死しなくてはならないと云ふ苦しみであつた。

それは恵まれない一家であつた。歌吉はもと平田村の生れであつた。父親は力藏と云つてゐた。其の父親の力藏が歌吉が五つか六つの年に歿したつたので、母親の久と云ふのが長男を残して其の時十位になつてゐた長女を伴れて横瀬村の大工の家へ再縁すると共に、歌吉は養子としてもらはれて来たものであつたが、双方劣らない貧しい百姓であつた。養父は初五郎と云つてゐた。其のうちに養父の初五郎が風疾になつて家業ができなくなつたので、遍路に出たところで體が良くなつた。養父は喜んで家へ歸つて来たが、其のうちに病氣が再發してたうとう不具者になつた。養父は仕方なしに炭山へ入つて炭俵を作りながら一家四人の口を支へてゐたが、間もなく歿したつたので一家は忽ち窮乏のどん底に陥つた。そこで養母は遍路に出たならば大師様のお蔭でまたよいことも廻つて来るだらうと云つて、僅な家財を賣りはらつてかうして家を出たのであつた。

養母は夫が遍路に出た時の支度を其のまま着けてゐた。首に掛けた行脚袋、金剛杖、菅笠、珠數、納經帳、札挟。ただ札挟の名は自分の名に書き改めてあつた。手には手甲、足には脚絆、背には笈

摺の上に男の子を乗つけてゐた。

歌吉の一行は先づ幡多郡以南の足摺岬にある蹉陀山金剛福寺へと往つた。金剛福寺は八十八箇所のうち三十八番の靈場であつた。足摺岬の岬端になつた其の境内には不思議なものが多かつた。龍馬が喫ふので笹が延びないと云ふ龍の駒の飼場。潮の満干によつて溜つてゐる水の増減する潮満石。地獄穴。釣鐘石。泣石。大師一夜の石鳥居。いすすの雨。ゆるぎ石と云ふのは歌吉の小さな手で押しても動いた。お龜さんと云つて其處から呼ぶと龜が浮んで来ると云ふ處があつた。養母は暗い顔をしてゐても歌吉はさすがに子供であつた。彼はくるくるした眼をして斷崖の下になつた海の上を見てゐたが、龜は浮んで来なかつた。

歌吉の一行は其處から平田村中山の延光寺へ往つた。一行はもうすつかり乞食遍路になつてゐた。民家を見かけると門口へ立つて施を乞うた。それには南無大師遍照金剛と大師の寶號を繰返し繰返しするのであつた。そして、一握の米か一椀の飯の施を受けると、當家先祖代頓證菩提と報謝して、續いて、をんあほきや、べいるしやなら、まらぼだら、まにそんどま、しんばら、はらばにだやらんと光明眞言を唱へた。光明眞言の後から復た大師の寶號南無大師遍照金剛。

土佐の靈場は延光寺で盡きて次は伊豫の南宇和郡御庄村の觀自在寺にたつたのであつた。歌吉の一行

は寒い苦ししいたよりない途が其の前に續いてゐた。一行は民家の門口に立つて受けた施で僅に飯をしのいで、土地によつては建ててくれてある遍路小屋と云ふ汚い堀立小屋に他の遍路と一緒に寝たり、辻堂の縁の下や岩の陰に寝た。

歌吉の一行は二箇月ばかりして伊豫國越智郡櫻井村の國分寺へ往つた。春は途中で過ぎて、稲の秧つた水田には蛙が啼き、川田には麥が黄ろくなりかけて雲雀が啼いてゐた。一行は國分寺に參詣して下山したところで、二三日煩つてゐた男の子の容態が急に變つて來た。養母は驚いて谷川の縁になつた金ぼうげの咲いた草原へ坐つて、子供を肩からおろして抱いた。子供はもうぐつたりとなつて荒い呼吸ばかりしてゐた。養母は途方にくれてしまつた。

「おう、おう、かはいさうに、かはいさうに、どうしたらええぢやらう」

どんなに思つたところで乞食遍路の身ではどうすることもできなかつた。

「此の餅を喫はさうか」

養母の傍に立つて同じやうに病人を見まもつて心配してゐた歌吉は、前日もらつた餅の残つてゐるのを思ひだして自分の行脚袋へ手を入れて執りだした。養母は熱のある病人に餅を喫はしたところで仕方がないと思つたが、子供のことであるからそれにまぎれて元氣の出ないこともないので、それを執つて子供の顔を覗き込んだ。

「お餅があるよ、坊、お餅があるよ」

子供は荒い呼吸をするばかりであつた。

「お餅ももう喫ふ元氣はないか」と、養母は悲しさに聲を顫はして云つた。

「餅を口へ入れてやり」

歌吉にさう云はれて養母は氣がついた。「さうぢやのう」と、云つて子供を抱いてゐる左の手に餅を持ちかへ、右の手の指端で餅をつまみだしてそれを子供の口のふちへ持つてゆき、すこし開いてゐる其の口の中へ入れた。「それ餓ぢやよ」

すると子供は舌でそれを突き戻すやうに出して、それまでつむつてゐた眼をぱちり開けて、あてどなしに其のあたりを見たが直ぐまたつむつてしまつた。

「餓も厭か、まあ、どうしてこんな病にかかつたらう」

養母が泣き聲を出した時、鼯鼠の影のやうに影をこしらへて其の前に來てのつそりと立つた者があつた。それは同じ遍路仲間の年とつた男遍路であつた。

「子供のあんばいが悪いかな」

養母はそれがたのもしかつた。

「悪うて困つてをります」

「どんなに悪い」

「二三日、ぐづぐづ云うて、機嫌が悪うございましたが、昨夜は通宵泣いて寝させましたが、朝ぼらけから、こんなになつてしまひました」

「體が熱いかな」

「火のやうに燃えてをります」

「さうか、それはいかん、私は醫者が巧者ぢや、見てしんぜよう」

年とつた遍路は手にしてゐた金剛杖を傍に立つてゐる歌吉に黙つて持たして、やつとこさと蹲みながら手を出して、子供の蛙のやうに瘦せ細つた右の手を持つて脈をあたるやうにしたが、「なるほど、

これは悪い、これは疱瘡ぢや」

「疱瘡」と、養母は驚いた。

「さうぢや、疱瘡ぢや、疱瘡でも佳い薬がある。それをしんぜる、飲ますがええ、きつと癒る」

養母はお大師様か假りに現はれて来て子供の難儀をすくうてくれるのであらうと思つた。

「有難うございます、どうかお助けを願ひます」

年とつた遍路は笈摺をおろして其の中から一服の薬を出しそれをくれてから往つてしまつた。養母は早速其の薬を飲ますことにして歌吉に云ひつけて水を汲みに往かした。歌吉は谷川へおりて手にし

た碗へ水を汲んで歸つて来た。

養母はそこで彼の薬を子供に飲ましたが、其處では子供を靜かにやしますことができないので、遍路小屋の在る處を聞いて其處へ行き、其處で數日の子供を養生さすことにした。

其の夜養母と二人で病氣の子供を看護つてゐた歌吉が、晝の疲れて眠るともなしに眠つてゐると養母の泣き聲が耳に入つた。歌吉はびつくりして眼を開けた。爐の中にあちろ燃えてゐる木の根ッ子の火に微に照された養母が、子供を両手でひしと抱きしめながら狂氣のやうに泣いてゐるところであつた。歌吉は子供心にも徒事でないと思つたので其のまま起きた。

「どうしたぜよ、どうしたぜよ」

歌吉の聲は養母の耳に入らなかつた。

「……お大師様にも見放されたか……、お大師様にも見放されたか……」

其の小屋には五六人の遍路が泊りあはせてゐたが、其の遍路達も養母の泣き聲を聞いて起きて来た。

「坊、坊、坊、坊」

養母は又其の眼を覺まさうとでもするやうに、抱いてゐる子供を揺り動かした。其の素振と云ひ聲

と云ひそれは平生の養母ではなかつた。歌吉ははらはらするばかりでどうすることもできなかつた。

「おかみさん、おかみさん、子供さんがどうかしなはれたか」
起きて来た遍路の一人が顔を近くへ持つて来た。

「子供が、子供が、し、しにました」と、云つて養母は又絶え入るやうに泣いたが、ふと気がついたやうに泣くのをやめて、「坊、坊、坊」と、云つて又子供を揺り動かした。

起きて来た遍路達は子供が歿したために母親が逆上してゐることを知つた。遍路達はそこで相談しあつて一方で母親を慰め、一方で村役人の處へ知らしめてくれたので、翌朝になると村役人が村の者を伴れ、一人の僧も一緒に来て近くへ子供の死骸を葬つてくれた。

養母は其の時喪心したやうにぼかんとして人の云ふままになつてゐた。葬式が終ると歌吉は村の人の云ふなりに、ぼかんとしてゐる養母の手を引くやうにして、六十番の周布郡千足村の横峰寺をさして出發したが、養母は脚下が亂れてゐて石塊に躓き草に足を取られた。そして、何かの拍子に氣がめぐつて來ると、歿した子供の名を呼んで泣きわめいた。

歌吉はもう夢のやうな氣持ちではゐられなかつた。彼は自分が前に立つてゆかなくてはどうにもならないと思ひだした。十一の少年は全身を眼にして周囲を見まはした。

歌吉に引きずられるやうにして往つてゐる養母の眼が、ふと路ばたに遊んでゐる二つ三つの子供に

往くことがあつた。養母は歿した子供の名を呼んで泣き倒れた。歌吉はさうした養母の機嫌をとりとり、民家を見つけると門口へ往つて施を受けた。

そんなことで一日の旅程は二里か三里であつた。子供と喪神の遍路は十餘日を費して河波三好郡馬地村の雲邊山の麓になつた白地へかかつたところで、養母は腹痛が起つて動けなくなつた。歌吉は近くにあつた遍路小屋へやつとのことで病人を伴れ込んだ。

養母はもう起つことができなかった。歌吉は附近の民家へ往つて施を受けながら介抱したが、湯か茶を飲まず位で他にどうすることもできなかつた。養母は衰弱するばかりであつた。養母はそんな中でも歿した子供の名を呼んで泣きわめくことがあつた。

村の人は病める母親を遍路小屋に於いて介抱してゐる少年の遍路に氣がついて、温な食物をくれるやうになつたが病人はたうとう癒らなかつた。村の人は歌吉の泣き聲を聞きつけて集まつて来て、僧に經を讀まして葬り戒名を書いた位牌まで作つてくれた。歌吉は其の位牌を手にして途方にくれた。

「どうか、土佐國へ送りかへしてください」

歌吉は子供心にも土佐の故郷へ歸るより他に往く處がないと思つたのであつた。村の人ももつともだと思つたが旅人を本國へ送りかへすことになれば、一應徳島の城下へ伺ひをたてないことには、村

のおちどになつてどんな咎めがあるかも知れん、徳島の城下へ人をやるには三日もかかるので従つて村の人費も大きかつた。

「送りかへしてやりたいが、旅人を送りかへすには、徳島の城下へ伺ひをたてないことには、村のおちどになつて、どんな咎めがあるかも知れん、徳島の城下へ伺ひをたてるにはなかなかめんだうだ、それよりか、元來た路を歸つて往けば土佐へ歸れるぢやらう」と、村の口ききが云つた。

歌吉はそこで元の路を引返すことになる、村の人は其處此處から集めた金を二朱金一枚にしてくれたので、歌吉は其の養母の位牌を風呂敷に包んで背に負ひ、地に映る自分の小さな影法師を路伴れにして白地を出發した。

自分の影法師を路伴れにして歩いてゐる歌吉の前に、三十位に見える頭を坊主にした遍路が歩いてゐた。獨りぼつちで淋しくてたまらなかつた歌吉は、其の遍路に近づいて往つた。彼の遍路も歌吉に氣がついた。

「お前は、何處だ」

「あたいは、土佐だよ、小父さんは」

「俺か、俺は九州の豊後だ、お前は一人か」

「お母と、弟と、三人で廻はつてをつたが、弟が前國分寺で死に、お母が今度白地で死んだきに、國へ歸りよる」

「さうか、そりや、かはいさうぢや、ぢや一緒に往かう」

歌吉は路伴れができたのでうれしかつた。二人は伴れ立つて歩いた。暫く往つたところで彼の遍路が云つた。

「此のさきの山の中に、お寺の開帳がある、參詣人もうんと來ると云ふから、もらひものもうんとある、伴れてやらう」

歌吉ももらひものが多いと聞いてうれしかつた。彼の遍路はやがて民家を離れて山の方へ往つた。

歌吉も其の後から従いて往つた。山の中の淋しい處へ往つた。ところで、彼の遍路は路ぶちの石にやつとこさと腰をかけた。

「一ぶくしていかう」

歌吉も傍の石に腰をかけた。すると彼の遍路が云つた。

「旅をしよると、着物へ虱が湧くが、お前はどうかぢや、見てやらうか」

歌吉が眼で返事をしたところで、彼の遍路は強ひるやうに云つた。

「見てやらう、ちよつくら着物を脱いでみな」

歌吉は厭とは云へないので仕方なしに起つて帯を解き襦袢ぐるみ着物を脱ぐと、彼の遍路はそれを取つて袂の中から裏の縫目の處までじろじろ見た後に、傍の風呂敷を引寄せて、「これは何んぢや」と云つて開けたが、位牌と一緒に包んであつた二朱金を見つけると、いきなり取つて行脚袋に入れた。片手には着物を持つたままで。

歌吉は驚いた。「とつちやいかん、戻したうせ」と、云つて手を出したが戻してくれさうにないので其の行脚袋に手をやらうとした。

「これや、何をする」と、彼の遍路は叱りつけるやうに云つた。「ぐぐぐ云ふと、此の山の木にくくりつけるぞ、黙れ」

歌吉は恐ろしくなつて體が縮んでしまつた。そして、氣がついた時には彼の遍路はもうゐなかつた。遍路は歌吉の頭にしてゐる笠と金剛杖と位牌とを残して他の一物は悉皆持つて往つてゐた。歌吉は困つてぼんやりしてゐたが、ふと脚下を見ると彼の遍路の落したものであらう襦袢はぎの襦袢が一枚落ちてゐた。

歌吉は仕方なしに其の古襦袢を着て民家のある方へ引返し、某一軒の家に往つて子供の古衣をもらつて着、其の夜は其のあたりの民家の軒に寝て歩いてゐると、昨日の盗賊遍路が民家の門口から門口を歩いて施を受けてゐるのを見つけた。歌吉はどうかして昨日の體を打ちたいと思つたが、子供で

はどうすることもできないので、見えがくれに其の跡をつけて歩いてゐると、十手を持つた捕卒が通りかかつた。歌吉は其の捕卒の前へ往つた。

「昨日、彼の坊主に金と着物を取られました」

捕卒は歌吉をたしかめながら彼の盗賊遍路を捕へて吟味した。遍路は着物は賣拂つてゐたが二朱金は其のまま持つてゐた。捕卒は其の場で金を返してくれた。歌吉は子供心にも胸のすつきりするのを覺えて心地がよかつた。

歌吉は夢のやうに徳島街道を歩いてゐた。此の歌吉の眼の前を一人の六部巡禮が歩いてゐた。歌吉は一人旅の淋しさから盗賊遍路に酷い目に逢はされたことも忘れて、又其の六部に近づいて往つた。「おう一人か、何處た」

六部は歌吉をじろじろ見た。

「土佐の幡多ぢや」

「一人で廻國をしよるか」

「お母と弟と三人で來たが、弟もお母も死んだから歸よるところぢや、かう往たらええぢやらうか」

「いいとも、小父さんは伊豫ぢや、日本廻國のため、日本國中を廻つてをるから、土佐へも行く、一緒に伴れてつてやらう」

「有難うございます」

六部は三十五六の男であつた。歩いてゐるうちに六部は、自分は伊豫の松山御領上市村の磯崎榮藏と云ふ者である云つた。歌吉は安心して従いて往つた。

六部榮藏は阿波讃岐の靈場から靈場を巡錫して、それから甲浦通り土佐に入り、室戸岬にある東寺から津寺西寺を経て神峯寺、大日寺、國分寺、一の宮から高知の城下へ入り、それから五臺山、禪師峯寺、高福寺、種間寺、清龍寺、青龍寺を経て、高岡郡窪川の岩本寺へ往つた。岩本寺の次は蹉陀になつてゐるので歌吉の故郷は近かつた。歌吉は喜んだ。

「蹉陀へ行くには、本道から往くと遠い、近道から往かう」

榮藏は歌吉を伴れて山道に入り幾つとなく高い山を越えて往つた。そして、十日ばかりの日が山中で暮れた。歌吉は子供心にも十日も歩いたから、一日に五里往くとしても五十里は來てゐる、もう故郷の近くへ來たらうと思つた。

「もう、上の土居村ぢやらうか」
すると榮藏は云つた。

「まだやつと十里位しか來てゐない、未だだ」

歌吉は不審に思つたがそれを口に云ひあらはすことはできなかつた。

其のうちに行は民家の多い海岸へ出た。榮藏は其の海岸にゐる船の中へ前に立つてあがつて往つた。歌吉は不審に思つた。

「船へ乗つたら、蹉陀へ往けまい」

「船で往けば、蹉陀は近いよ」

歌吉は仕方なしに船に乗つたところで、其の船は出帆して翌朝になつて港に着いた。歌吉は港に着いたならすぐあがるだらうと思つてゐると榮藏は、「ちよつと待つてをれ」と、云つて歌吉を残して一人であがつて往つた。歌吉はどうもをかしいので傍にゐる人に聞いてみた。

「此處は蹉陀ぢやらうか」

「此所は豊後國の佐賀の關と云ふ處ぢや、昨日船に乗つた處は、伊豫國の八幡濱ぢや、蹉陀は五十里も離れてをる」

歌吉は榮藏にあざむかれたのが口惜しかつた。歌吉は何も云はないで泣いてゐた。そこへ榮藏が歸つて來た。歌吉はいきなり榮藏に飛びかかつた。

「嘘つき、狸、人をだまして、何故だましたなら」

榮藏はどつかり坐つて歌吉の顔を見て云つた。

「だましたは悪かつたが、一人旅では迂散な者と疑はれて、宿をかしてくれる者がないために、氣の毒だが一緒に伴れて来た、しかし、廻國がすめば歸るから、其の時まで待つてくれ、國元へ送り届けてやるから」

さう云はれると歌吉もそれ以上は何も云へなかつた。彼は仕方なしに榮藏に従て往つた。榮藏はそこで歌吉を伴れて上陸して豊後豊前筑前筑後肥前を巡錫して長崎に出た。長崎の港では唐の船が二艘あるのを見た。

一行は肥後から熊本に往き、日向大隅を経て薩摩にかかつたが、薩摩は人の氣が荒くて旅人を殺害するといふことを聞いたので、引返して筑前に入つて太宰府の天満宮に参詣し、それから佐賀の關に歸つて船に乗つた。

「今度こそ土佐へ歸しておうせ」
榮藏は返事をしなかつた。そして、榮藏は其の返事のかはりに、「俺は、子供の時から劍術が好きで、腕がある、いらんことを云ふものは酷い目に逢はせろ」と云つた。

歌吉は恐くなつて強ひては云へなかつた。一行を乗せた船は藝州廣島に著いた。歌吉はそれでも土佐へ歸りたいと云つたが榮藏は返事をしなかつた。

一行はそこから周防に入つた。周防には算帳橋と云ふ珍らしい橋があつた。一行はそれから長州に往き、岩見に往き、岩見から出雲に往つて大社に参詣したが、其の時になつて榮藏は歌吉に六部の裝束を調へてくれた。

一行はそれから中國を渡る限なく巡錫して畿内に入り、紀州の那智にも往き、それから北國に往き、北國から近江路通り引返して伊勢に出で、伊勢から東海道を巡錫して安房から上總に往き、また引返して甲州から美濃に出で、それから飛騨に入り、木曾路に出で御嶽に登り、松本通り長野に往つて善光寺に参詣し、終つて諏訪通り甲州に入り、それから初めて江戸の人となつた。

それは天保六年の八月であつた。江戸では山下町の足袋屋に一箇月ばかり逗留して、市内を見物して歩いたが其の時は歌吉も不平も苦痛も忘れてゐた。

九月の十八日になつて榮藏は又江戸を出で北行しようとした。歌吉は驚いて止めたが榮藏はきかなかつた。

そして、日光に参詣して中禪寺湖を見、宇都宮から上州館林に往き、それから下野國芳賀郡飯貝村に往つたところで、榮藏は江戸を出る時から痛んでゐた足がますます痛くなつて動けなくなつた。飯貝村は天領の地で代官がゐた。代官は榮藏を行路病者として小屋を造らして入れてくれたが、翌年即ち天保七年三月八日になつて歿くなつた。

歌吉は土地の豪農大塚孫右衛門の家に引取られて世話になり、榮藏の毎日の食物も其の大塚家から送つてゐた。そして、榮藏が歿くなると大塚家では歌吉を養子にすると云つたが、幕府の指圖があつて土佐から歌吉の親類の者が迎ひに來たので、歌吉は其の年の九月になつて土佐に歸り、一應お目附方の吟味の上で歸郷を許された。——これは御目附方が歌吉の口述に基づいて寺石正路先生の書いたのを材料にしたものである。

四國遍路の奇蹟

昭和六年正月十五日の事であつた。高知縣香美郡野市町の森田と云ふ農家へ五十位の總髮の四國遍路が來た。丁度午飯の時、盲目の喜久次翁さんも、女房の彌久於媼さんの給仕で飯を喫つてゐた。遍路は喜久次翁さんの不自由さうな手つきを見て、

「貴下は眼がお悪いやうだが、見えないですか」

と云つた。喜久次翁さんは其の時六十二歳であつたが、二十五年前に田の草除に往つて、稻葉で右

の眼を突いてまづ右の眼の明を失ひ、十三年前に白内障になつて左の眼の明を失つてゐるので、其の事を話した。

「さうですか、それでは禁厭をしてあげませう、五日で見えますよ」

遍路はそこで何か禁厭をして往つてしまつたが、果して二十日の朝になつて、眼を覺ました喜久次翁さんは、遍路の詞を思ひ出して枕頭へ眼をやつたところで、右の方の眼がはつきりしてゐて四邊の物が見えた。

「見える、見える、見えたした」

喜久次翁さんが狂人のやうに叫んだので、彌久於媼さんも息子の忠次も、嫁の糸江も一家の者が喜久次翁さんの傍へ集まつて喜びあふとともに、恩人の遍路に禮をすることにして行方を捜したが、不明であるところから、附近では喜久次翁さんの日比信仰してゐるお大師様が、假に姿を現はして癒してくれたものだと云ひあつた。

高知市の新聞記者は香美郡野市町の東組にある森田家を訪うた。森田家は道路から北へ折れて吉祥寺へ往く田圃道を、一町程往つた道の東側の小さい百姓家であつた。喜久次翁さんは、其の時の事を記者に話した。

「皆で飯を喫つてをりますすと、遍路さんが來て、體は丈夫のやうだが、眼が悪いか、そんなら一つ禁厭

をしてやらうと云ひますから、遍路さんの云ふとほり、盃に充滿水を汲んで来さすと、遍路さんは暫く祈つてをりましたが、それがすむと、其の水を私に一口飲まして、後の水で眼をあらつてくれました、其の時洗つた方の眼から涙が出ました、そこで遍路さんは、「もうこれで大丈夫ぢや、五日目には見えますよ」と云うて出ていきましたが、其の時鏡を五鏡と米を盆に一杯お大師様へと差しだしました、ところがそれから五日経つてみると、其の遍路さんが云うたとほりになりました、其の時私は一番に女房の顔を見ましたが、當時四十三四の壮かつた女房が、これは亦白髪の婆さんになつてをるぢやありませんか、ちやうど浦島太郎のやうでございましたよ」

喜久次翁さんの眼を癒した四國遍路は、其の日森田家を出ると、直ぐ南隣になつた森田馬吉の家へ現はれて、

「今、其處の翁さんの眼をまじなつてやつたが、五日すれば、きつと見える」

と云つた。馬吉の家では妙な事を云ふ遍路だと云つてゐたところで、それが喜久次翁さんの眼を治した謎の遍路であることが判つた。

野市町の町民は森田家を中心にして、彼の遍路の行方を捜してゐると、一週間位して高知市の青柳橋附近で發見したので、森田家へ伴れて来たが、それは東京市本所區練町六十六番地の高橋一郎と云ふ人で、年は五十一。大震災の際焼け出されてから全國を行脚してゐる者であつた。

奇蹟を行ふ遍路の噂が傳はると、縣下は勿論縣外からも来て祈禱を請ふ者が引ききれぬほどであるが、其處にも奇蹟が現はれて、跛者が歩き、盲目が眼が見えだすと云ふ有様であつた。現に其の奇蹟的で全快した者は左の人びとであつた。

香美郡美良布村吉野岡本番典(二〇)は、昨年七月以來の脊髓關節炎で跛者となつてゐたのが歩行的自由を得て全快。

香美郡富家村鬼田西内菊次(七二)は、三年前眼病で右眼が失明してゐたのが祈禱の結果全快。

香美郡野市町西野森田春子(四八)は、多少の精神異状ありしも全快。

其の他香美郡三島村奴田原千代(一七) 同郡佐古村大谷杉村繁緒(五七) 同郡野市町石丸時子(一

二) 同町下村幾野(八一) 同町寺尾千鶴(二九) など多數であつて、中には醫者が祈禱に来ると云ふ騒ぎであつた。

如來像の怒

四國遍路の奇蹟で、二十五年間も開かなかつた目が開いたと云ふ噂の高い時、阿彌陀如來像が怪異を現はしたと云ふ事件が起つた。其の如來像と云ふのは、廢佛毀釋の際にでも、何處かの寺から出たものか、それが高知市の縣立農學校の近森教諭の手に入つた。

近森教諭は書齋へ置いて、藝術的立場から愛玩してゐたが、香美郡野田村の高橋喜馬太が輪旋してくれたので、同郡立田町の樋口醫院へ譲渡する事になつて、如來像を樋口醫院へ送り届けたが、其の歸路大負傷をした。一方樋口醫院でも、家内一同が其の夜吐たり下したりして大騒ぎを起した。

樋口醫師は如來像が氣になるので、翌朝車夫を頼んで仲介者の高橋方へ送り返したが、其の車夫も歸宅するやいなや、吐いたり下したりの重病人となつた上に、其の細君が無茶苦茶に空腹を覺えて、病人は其方除けにして一度に八杯も飯を掻き込むと云ふ狂態ぶり。更に仲介人の高橋の細君も、體一面に吹き出物がして、痛い痒いで大騒ぎになつた。

そこで、協議の結果、如來像を何處かの寺へ奉納することにして、高橋がおうかがひを立てると、「山田町の高野山へ往く」

と云ふ宣託があつたので、直に高野山總代川村晋の手を経て、安部院主に相談し、自動車五臺で盛大な入佛式を擧行したが、それを聞いた者は、「祟るのなら御利益もあるだらう」

と云つて、參詣者が絶えないとのことであるが、當の近森教諭は、「此の阿彌陀像には、百五十圓と云ふ金がかかつてをりますが、今となつては金錢などの問題ではありませぬ」と云つてゐるが、何分如來像の怒に觸れた者が唯の善男善女でなく、相當教養のある人ひとであるから、一層世間の注意を惹いてゐると同地の新聞は報じた。

掠奪した短刀

松山寛一郎は香美郡夜須の生れであつた。寛一郎は元治元年七月二十七日、當時土佐の藩獄に繋かれてゐた武市瑞山を釋放さすために、野根山に屯集した清岡道之助一派の義擧に加はらうとしたが、時期を失して目的を達することができなかつたので、それ以來自暴自棄になつて、毎日のやうに喧嘩ばかりして歩いてゐたが、其のうちに慶應四年になつて、鳥羽伏見の役が起り、板垣退助が土佐の藩兵を率ゐて東上した。寛一郎も其の旗下に屬して、迅衝隊の隊士として會津へ往つたが、會津城が陥

つた夜、會津藩士の家へ押し入つたところで、一人の婦人が自害しようとしてゐた。見ると婦人の手にした短刀が立派なので、怒心がきざした。で、血で短刀を汚さないうちにと思つて、いきなり婦人を斬り殺して短刀を掠奪した。

其のうちに東北が平定して官軍も凱旋した。寛一郎もひとまづ江戸へ引きあげ、それから翌年になつて故郷へ歸つたが、世間も静になり、世の中もかはつて來たので、いよいよ故郷に落ちつくことにして、家を建て、細君ももらつて新しい生活に入つた。

處で、其の翌年の夏になつて、不思議なことが起つた。それは某夜、夫婦で床に就いて、細君は早く眠り、寛一郎一人がうつらうつらしてゐると、何處からともなく火の玉が來て、蚊帳の上を這ひだした。寛一郎はもとより剛膽な男であるから、嘲笑つて見てゐた處で、すぐ火の玉は見えなくなつた。朝になつて蚊帳を調べて見ると、火の玉の這つたと思はれる處が黒く焦げてゐた。

寛一郎はちよつと不思議に思つたが、大して氣にもかけずにゐた處が、其の夜になつて壁厨の中から短刀が飛出して來て枕頭へ立つた。其の短刀は會津から掠奪して來たものであつた。寛一郎はおやと思つて眼をやつた。同時に寛一郎の眼が覺めた。寛一郎は夢を見てゐた處であつた。

怪異はまだ續いて、其の翌晩は短刀が飛び出して來て胸を傷つけた夢を見た。同時に痛みを覺えるので、燈を點けてみると、其處に傷が出來て血が出てゐた。

短刀の怪異は、それから白晝にも起るやうになつた。短刀が飛び出して來て、體に當るやうな氣がするとともに、其處に痛みを覺えて傷が出來、同時に血が出るのであつた。

「女の祟ぢや」

さすがの寛一郎も弱つてしまつて、高知市の東北になつた陽貴山へ往つて其處の和尚に、

「何とかして、封じてもらひたいが」

と云つて頼んだ。和尚は承知して、寛一郎の家の後へ小さな祠を建てさせ、其の中へ彼の短刀を納めさせたところで、それからは何の異状もなくなつた。そして、後に寛一郎が歿くなつた時、家人が祠を調べてみると、短刀は無くなつてゐた。

朝倉一五〇

洋賣家の橋田庫次君の話であるが、橋田君は少年の頃、吾川郡の弘岡村へ使に往つて、日が暮れてから歸つて來たが、途中に荒倉と云ふ山坂があつて、其處には鬼火が出るとか狸がゐるとか云ふの

で、少年の橋田君は鬼魅がわるかつた。

橋田君はその時自轉車に乗つてゐた。やがて荒倉の麓へ来たので、自轉車をおりて、それを押し押しあがつて往つたが、暗くはなるし人の子一人通らないのでひどく淋しかつた。そしてやつとの思ひで峠へたどりついた。峠には一軒の茶店があつて、門口に提灯を点けた一臺の人力車がゐたが、それには朝倉一五〇としてあつた。朝倉一五〇の提灯を持つてゐるからには、朝倉の車夫であらう。兎にかく一休しようと思つて茶店の入口へ往つた。すると傍から聲がした。

「哥さん、どうせ乗つて行きや」

どうせ乗つて行きやといふ事は變ないひまはしであつた。橋田君は厭な氣がした。そこで、

「うん」

と云つたきりで、茶店へ寄る事もよして、そのまま自轉車に飛び乗つて坂路を駈おりた。

かなり勾配のある坂路であるから、自轉車はすうすうと滑つて往つた。そして、中央まで往つたところで、後から一臺の人力車が来て、橋田君の自轉車を駈ぬけて走つたが、すこしも轍の音を立てなかつた。橋田君はどうした車だらうと思つて眼をやつた。車には朝倉一五〇の提灯が點いてゐた。橋田君は眼を睜つた。一生懸命に駈けおりてゐる自轉車を、あれからすぐ追つかけて来たところで、人間わざでは駈けぬけることはできない。橋田君はちよつと變に思つた。

やがて麓へおりて、途が二つに岐れた處へ往つた。その路を左へ往けば、朝倉聯隊に往くやうになつてゐた。と、見ると、地の底からでも出て来たやうに、其處へ一臺の人力車が来て、朝倉聯隊へ往く方の路へ折れて往つた。橋田君はおやと思つてそれに眼をやつた。その車にも朝倉一五〇の提灯が點いてゐた。

飛行機の怪紳士

A操縦士とT機關士は其の日も旅客機を操つて朝鮮海峡の空を飛んでゐた。其の日は切れぎれの雲が低く飛んで、二〇メートルと云ふ烈しい北東の風が、水上機の兩翼をもぎとるやうに吹いてゐた。下には荒れ狂ふ白浪が野獸が牙をむいたやうになつてゐた。

機體は木の葉のやうに揺れた。それは慣れてゐるコースであるが、二人にとつてこれほど苦しい飛行はかつてなかつた。A操縦士はハンドルに、T機關士はエンジンにそれぞれ全神経を集めてゐた。突風に乗つたと見えて機體がぐらぐらとなつた。T機關士ははつとして眼をあげた。機體は眞黒い

雲の中に入つてゐた。

(あぶない)

同時に體が浮くやうになつた。機體は猛烈な勢で落ちてゐた。

「あ」

T機關士は思はず叫んだ。しかし、それも瞬間、飛行機は其のまままたぐんぐんとあがつて往つた。

(よかつた)

T機關士はほつとした。そして、額の脂汗を拭きながら、見るともなしに後の客席に眼をやつた。左側の二番の客席に、瘦せぎすな一人の紳士が腰をかけてゐた。發動機の整備と云ふ重大な任務をもつてゐるT機關士は、出發の時には何人よりもさきに機上の人となるので、したがつて何んな客が幾人乗るか、そんな事にはすこしも注意しなかつた。

(お客さんは一人か)

其の時A操縦士がちらりと後をふりかへつた。風はますます烈しくなつて、其のうへ雨さへ加はつて來たので機體は無茶苦茶に揺れた。T機關士は鉛筆を執つてメモに何か書いてゐたが、やがてそれを前にゐるA操縦士に渡した。それには、

「客は一人か」

と書いてあつた。するとA操縦士は前方を向いたまま軽く頭を振つた。T機關士はまたメモに鉛筆を走らした。

「では、二人か」

A操縦士の頭がまた左右に動いた。

(客席には一人しか見えないが、をかしいなあ)

T機關士は不思議に思つて後を見た。客は依然として身うごきもしないで窓外を眺めてゐる。

(やつぱり一人だ)

T機關士がさう思つた時、A操縦士の右手が動いて、前の防風ガラスに指が往つた。

「なし」

A操縦士は明らかに客はなしと書いたのであつた。同時にT機關士は背すぢに水をかけられたやうに思つた。T機關士はあわて、鉛筆をとると、何かに追はれるやうにしてメモの上を走らした。

「そんなことはない、左側二番目の椅子に、たしかに一人ゐる」

其の紙片を受けとつてちらと眼をやつたA操縦士は、これもはじめられたやうにして後を見た。

「あ」

T機關士の云つたやうに、たしかに後の客席に瘦せぎすな一人の紳士がゐるのであつた。其の日たしかに乗客のないことを知つてゐたA操縦士は頭がぐらぐらとした。

しばらくたつてからA操縦士はやつと心をおちつけた。そして、T機關士に手眞似で、

「往つてみよ」

と云ふやうにした。T機關士はうす鬼魅が悪かつたが、それでも勇氣を出して客室の方へ進んで往つた。客室はがらんとしてゐた。

(へんだぞ)

T機關士はドアの後から椅子の下をきよろきよろと見まはしたが、今までゐたはずの客の姿は何處にも見えなかつた。

やがて着白い顔をして座席へ歸つて来たT機關士は、夢中で三本の氣鑿桿を握つた。三個の發動機は狂氣のやうな大きななりを立て、回轉計の指針は最大の速度を示してゐた。

T機關士は無言のまま其の指針を見つめてゐた。其の時機體が生のあるもののやうにぐらぐらと揺れた。

追つかけて来る飛行機

昭和六年の夏の夜のことであつた。大連で夜間飛行の練習をやつてゐると、計器盤のある處に點いてゐるライトの光で、其の黒塗の計器盤に、己の乗つてゐる飛行機の後から、今一臺の飛行機かやはり同じ方向に向つて飛んで來るのが映つた。

そんなことはない、錯覺だ、と思ひながら計器盤を見るとやはり映つてゐる。たうとううす鬼魅が悪くなつて、其の夜の練習を中止したことがあつたが、かうした錯覺や幻想は決して珍らしいことではない。

某時壯い飛行士が、

「海賊があるから、やがて空賊と云ふのができるかも知れないよ」

と云つたことがあるが、其の時其の飛行士は、此の空想に更に小説らしい空想を織りこんで、

「胴體を眞紅に染めて、白抜きで白骨を描いてあるよ、機はカーチスの小型機で勿論機關銃があり、操縦士は腕利きで、そして、支那海から朝鮮海峡に盛んに出没するんだね」

と云つてゐたが、まもなく此の飛行士は蔚山福岡間の海峡飛行の時に己の空想が事實となつて現れ

たのに驚いた。

蔚山を發つてまもなく、エンジンの激しい音の間にばら、ばら、ばらと云ふ異様な音が走るので、不思議に思つて海の上に眼をやると、其處には己の飛行機の姿が判然と影を落してゐる。

「ばかな」

と幾ら考へ直しても、やはり追ひかけられてゐると云ふ氣もちをとりさることができなかつた。

「しかし、幸にまちがひがなくてよかつたのですよ、うつかりすると、とんだ事故を起しますからね、だからわれわれには、くだらない空想は禁物です、陸の飛行には少いのですが、洋上になると視野が單調ですから、したがつてそんなことが多いのですよ」と云つて某飛行士がしみじみ述懐したことがあつた。

人のゐない飛行機

航空兵少佐の某君が遭遇した實話である。

某飛行場に近い畑の中に、一臺の軍用機かふはりふはりと降りて來た。勿論プロペラーの回轉を落した空中滑走である。

空は紺青色に晴れてゐた。附近で働いてゐた百姓たちが、

「飛行機だ」

「飛行機が降りた」

と云つて、着陸した飛行機にちかづいて見ると何人もゐない。

「なんだ、人がゐねえちやねえか」

「兵隊さんはどうした」

百姓たちは驚いた。そこで氣の早い連中が機體によち登つて操縦席から機關室を探してみたがやはりゐない。

「無事装置かも知れねえや」

しかし、さうでもないらしい。まもなく駐在所の巡查が來、村の有志が來て頭をひねつたがどうしても判らない。なにしろ人間の乗つてゐない飛行機か、操縦者でもあつて操縦してゐるかのやうに悠々と着陸したことであるから、人びとはまるで狐にでもつままれたやうに不思議かつてゐた。

そこへ飛行服を着た一人の將校がパラシウトを背負つたまま駆けつけて來た。そして、飛行機を見

ると、

「おう」

と云つて機體に抱きついた。それは航空兵少佐の某君であつた。某君は部下の軍曹とともに飛行中、機體に故障を生じたので、それぞれパラシウトで難を避けたが、今來て見ると己たちの乗つてゐた飛行機がすこしの損傷もなく着陸してゐたので、まるで愛見にでも逢つた時のやうに嬉しかつた。某君が夢中になつて喜んでゐるところへ、これもパラシウトを背負つた同乗の軍曹が駆けつけて來た。

(へんだなあ、この飛行機は)

まもなく百姓たちから前後の事情を聞いた某君と軍曹は、己たちがわざわざパラシウトに身を托して飛び降りたことを思ひだして、顔を見あはして苦笑した。

空中に消えた兵曹

大正七八年比のことであつた。横須賀航空隊のN大尉とS中尉は、それぞれ陸上偵察機を操縦してA飛行場に向けて長距離飛行を行ひ、目的地に到着して機翼をやすめるひまもなく、直に歸還の途についた。

兩機は一千米の高度を保ちながら雁行してゐたが、箱根の上空にさしかかつたところで、密雲のために視界を遮られたうへに、エアポケットに入つて機體が烈しい勢で落下した。そして、二百米ばかりも落下して、やつと危険を脱したので、N大尉はやや安心して僚機の方を見たが、僚機の姿は見えなかつた。

N大尉は己でも危険に遭遇してゐるので、もしや彼の時にどうかしたのではないかと思つてS中尉の身の上を心配しいしい歸つて來た。それで着陸するなり、機體の手入れも忘れて西の方ばかり見てゐた。と、二十分ばかりして僚機の姿が夕暮の空に見えて來た。N大尉はほつとして僚機の著陸するやいなや駈けて往つて、S中尉の手を執つた。

「おめでたう、やられたらう」

「やられた、君もか」

「さうだ」

それからS中尉は後の方を見た。それは同乗のM兵曹に聲をかけるためであつた。が、其處には何

人もあなかつた。

「おや」

みるみるS中尉の顔色がかはつた。N大尉も氣が注いだ。

「M兵曹か」

「さうだ」

「どうしたのだ」

「さあ」

「何處からあなくなつたのだ」

「箱根へかかるまでは確にゐたのだが」

「それはたいへんだ」

航空隊の方ではM兵曹の行方を搜索したが判らなかつた。其の一方でS中尉は、すっかり憂鬱になつて平常の快活さを失つた。そして、夜など歩いてみると、往きちがつた人の顔がM兵曹の顔に見えたり、又飛行機に乗らうとして、機體に手をかけようとして見ると、同乗の練習生の顔がM兵曹に見えたりした。

それは冬の薄曇のした日のことであつた。N大尉が格納庫の中で機體の手入れをしてゐると、飛行

服を着たS中尉が顔色をかへて飛んで来て、

「M兵曹がおれの機に乗つたのだ」

と云つたかと思ふと、其のままぱつたりと倒れてしまつた。N大尉は驚いてS中尉を抱へて病室へ駆けこんだ。後で聞いて見ると、練習飛行中、S中尉が何の氣もなしに後をふりむいてみると何人もあなかつた同乗席に、飛行服を着た一人の男が腰をかけてゐた。それは、眞蒼な顔をしたM兵曹であつたから、夢中になつて著陸したと云ふのであつた。

そんなことでS中尉は極度の神経衰弱になり、熱海へ轉地して静養してゐると、翌年の春になつてすつかり元氣を回復したので歸つて来た。N大尉は非常によろこんで、それから毎日のやうに二人で練習飛行を行つたが、某日N大尉が練習を終つて兵舎へ歸つて汗を拭いてゐると、練習生の一人が飛びこんできた。

「〇〇機が墜落しました」

「なに、〇〇機か」

〇〇機は今までN大尉とともに練習飛行を行つてゐたS中尉の操縦してゐた飛行機であつた。N大尉は夢中になつて墜落現場へ駆けつけた。機體は大破してS中尉は血まみれになつてゐたが、同じく駆けつけてゐた軍醫が生命に別條はないと云つたのでN大尉はほつとした。

それから数日して、N大尉が海軍病院へ見舞に往くと、S中尉は繃帯の中から恐怖におびえた眼を見せて、墜落の原因を話した。

「雲の中を往つてると、向うの方から同じやうな飛行機が来て、今にも衝突しさうになつたから、驚いてハンドルを廻したが、其の時向うの飛行機を見ると、M兵曹が操縦してゐるぢやないか、僕ははつと思つて顔を伏せたが、それつきり判らなかつたよ」

S中尉が墜落したのは、M兵曹が空中に消えてから、ちやうど一周忌にあたる日であつた。

(平野嶺夫氏談)

電球にからまる怪異

ホルルルの日本領事館の談話室では、領事はじめ書記生達が三四人電燈の下に顔を集めてゐた。普通の役所と違つて僻遠の土地に小人數でゐて、萬一のばあひには生死を共にしなくてはならないと云ふ處では、表面的には地位の相違はあつても殆んど一家族のやうな生活をしてゐるので、かうした席

などには無遠慮な口を利きあつてはしやぐのであつたが、其の晩は平生になく皆が生眞面目な顔をしてゐた。書記生の△△君が病氣で入院してゐるが、非常な重態で皆でかはりばんこに枕頭につめてゐるがためであつた。

其の時書記生の某君が煙草を點けて一吸ひしながら、ちよつと眼を窓の外へやつたところが、庭の前の左の方から折れまがつて来てゐる室があつて其處に燈が點いてゐた。其處は撞球室になつてゐた。

「おや、燈が點いてるが何人かやつてるだらうか」

さう云つたものの彼は其處に何人もゐないことを知つてゐた。

「球を撞いてる、何人だらう」

並んでゐた仲間の書記生の一人も其の方へ眼をやつた。

他の人達も二人の詞を聞いて撞球室の方を見た。

「何人だらう」

「△△君ぢやあるまいな」

△△君はひどく撞球が好きであつた。

「さうだ、△△君なら判らないな、好きだつたから」

「あんなのを球の轟と云ふだらう」

「ボーイがやつてるのぢやないか」

「さうだなあ、ボーイかも知らない」

「さうだらう、さうでなければ、今晚球を撞くやうな奴はゐないはずだ」

「僕が往つて見よう、ボーイだよ、あの背の高い方の支那人は、平生熱心に見てるから、あいつかも知らないよ」

最初撞球室に燈を見つけた書記生は、談話室を出て撞球室の方へ往つた。そして、扉を啓けて室の中へ入つたところで、室の中には燈があるばかりでべつに人もゐなかつた。彼はボーイが何人か人の来る氣配がしたので氣をきかして點けたものか、それともスキッチのぐあひで自然と點いたものだらうかと思ひ思ひ、扉を締めて室の外へ出るなり、入口の壁に執りつけた其のブツシユボタンスキッチを切つて談話室へ引返した。

「あれは、ボーイが氣をきかして、何人か来ると思つて點けたものだよ、もう消えたらう」

「また點いたよ」

「なに、點いた」

「君は一度消しといつて、すぐまた點けたぢやないのか」

「そんなことがあるものか」

最初に撞球室の燈を見つけた書記生は、己のゐた席の方へ往つて其處から撞球室の方を見た。なるほど消したはずの燈が明るく點いてゐる。

「僕は室を出て、スキッチを切つたが、どうしたのだらう」

「スキッチがどうかなくなつてるぢやないのか」

「さうだなあ、さうとしか思へないなあ、しかし、をかしいな、も一度消して來よう」

彼は續にもさはるので再び談話室を出て撞球室へ往つたが、今度は扉を啓けて其の扉が後へもどらないやうに體でささへて、室の中の燈をたしかめた後にスキッチを切つた。燈は消えて室の中は眞黒になつた。彼は其のまま其處に立つてスキッチに故障があるか無いかを調べてみたが、べつに故障もないのか燈も點かないので、安心して體を引いて引返した。

「今度は消えただらう」

「また點いたよ」

「なに」

彼は叱るやうに云つて自席の方へ往つて、其處からまた撞球室の方を見た。撞球室には燈が點いてゐた。

「どうも不思議だ」

彼は暫くスキツチを切つて暗い中にゐたことを話した。

「たれか悪戯に點けるものがあるのぢやないか」

「さあ、それにしてもへんだな」

そこへ電話がかかつて来た。書記生の一人はベルの音を聞いてあたふたと電話室へ往つた。それは△△君の容態に變化があれば、詰めてゐる同僚の一人が知らして来るはずになつてゐたがためであつた。皆話をやめて耳をたてた。

「……領事館です、あなたは……さうか、君か、病人は……いけない、……球が球がつてうはごことを云つてゐるつて、さうか、球でも撞いてるやうに思つてゐるだらう、それで、いけないのか……さうか、よしよし、すぐ往くよ、それでは」

電話を聞いてゐた書記生はどたと入つて来た。

「△△君が、どうもいけないから来てくれと云ふのです」

そこで三人の者が病院へ駆けつけたが、△△君はもう呼吸を引きとつてゐた。

長崎の電話

京都西陣の某と云ふ商店の主人は、遅い晝飯を喫つて店の帳場に坐つてゐると電話のベルが鳴つた。主人は己で起つて電話口へ出てみると聞き覚えのある聲で、

「あなたは——ですか」

と云つて此方の名前を聞くので、

「さうです、あなたはどなたです」

と聞くと、

「わたしは〇〇です」

と云つた。それは主人の弟で支那へ往つてゐるものであつた。主人は喜んで、

「お前は歸つたのか」

と云つて聞くと、弟は、

「わたしは病氣になつて、今、長崎の——旅館へやつと歸つたところです、兄さんに、是非會ひたいから、どうかすぐ来て下さい」

と云つたかと思ふと電話は断れてしまつた。主人は病氣の模様を聞きたいと思つたが、電話が断れたので残念でたまらなかつた。しかし、病氣ですぐ會ひたいと云ふからには、すぐ往つてやらなくてはいけないだらうと思つて、電話口を放れたところで、番頭の顔が見つかつたので、

「支那へ往つてた弟が、病氣で長崎まで歸つて、すぐ来てくれつて電話がかかつて来たから、これから往つて来る、後をよく氣を注いでくれ」

と云つた。すると番頭が變な顔をして主人の顔を見返した。

「長崎へ電話が通じてをりますか」

其の時は明治四十三年の八月比のことで、長崎への長距離電話は無論なかつた。主人は氣が注いで電話局へ問あはしてみた。果して長距離の電話もなければ、今電話をつないだこともないと云つた。主人はますます不思議に思つたが、其のままにしてもおけないので、とにかく長崎へ往くことにして、其の日の汽車で出發して長崎へ行き、怪しい聲が云つた其の——旅館と云ふのへ往つてみると、病をおして支那から歸つて來てゐた弟は、兄の往くのを待たないで病死してゐた。後で詮議してみると、電話のかかつて來た時は、弟が息を引とつた時であつた。此の話は明治四十三年十月、田島金次郎翁が其の時京都にゐた喜多村線郎氏を訪問した際に、其の席上にあはしてゐた醫師某が、眞面目な知人の話だと云つて話した話である。

日本橋まで

夜の一時すぎであつた。ガレーヂでうとうととしてゐた運轉手の一人は、

「おいおいお客さんだよ、日本橋まで大急ぎだ」

と云つて叩き起された。運轉手はあわをくつて跳ね起き、上衣をひつかけやるやいなや運轉臺へ飛び乗つて、其のままエンジンをかけて日本橋へ往つたが、日本橋の何處へ往つていいか判らないので、

「日本橋は何のへんですか」

と云つて客の方を見たが、其處には客の姿が見えなかつた。運轉手は蒼くなつてガレーヂへ歸り、そして奥へ飛びこまうとすると、其處にゐた同僚の一人が怒鳴つた。

「なんだ、客を乗せないで、往つちまふ奴があるかい」

消えてなくなつた女

夜の九時比であつた。澁谷の道玄坂を流してゐた自動車は、傍の巷から出て来た三人伴の女客を銀座までと云ふことで乗せた。女と云ふのは二十前後の女が二人と母親らしい老女の三人であつた。運転手はいい氣もちになつて車を走らせたが、さて銀座へ往つて客をおろして見ると、母親らしい女と娘らしい女の二人になつてゐた。運転手は不思議に思つて、

「も一人のお嬢さんは」

と云つて聞いてみた。すると母親らしい女が厭な顔をして、

「も一人つて、はじめから二人ですよ、どうかしたのですか」

運転手は首をかしげたが、何かしら脊すぢに悪感を感じて其のままハンドルを握つた。其の後其の運転手に、

「君それや、疲労から来る錯覚ぢやないか」

と云つてからかふ者があると、運転手は眞顔になつて、

「いやそんなことはない、夕方に交替して、まだ二時間と経つてないから、疲れるはずがないよ」

と云つた。

王子稻荷の前

三の輪の車庫前を流してゐた自動車は、王子稻荷の前までと云ふ約束で客を乗せた。それは二十二三の蠟燭のやうに瘦せた男で、顔の色は眞蒼であつた。

環状線を走りながら客は消え入るやうな聲で運転手に話しかけたが、何を云つてゐるのかさっぱり判らないので、運転手はいいかげんな返事をしてゐた。

そして、其のうちに客の聲が聞えなくなつたので、運転手はいい氣もちになつて車を走らせ、やがて王子稻荷の前まで往つたので、

「王子稻荷ですが、此處ですか」

と云ひながら客のはうを見た。客の姿は何時のまにか消えてなくなつてゐた。運転手は蒼くなつて歸つて来たが、其のまま床に就いて三日ばかりうなされた。

毒を仰いだ運轉手

昭和十年四月十三日附の讀賣新聞に裸殺した男の亡靈に惱まされて、服毒自殺を謀つた自動車の運轉手の話が載つてゐたので、筆を加へずに其のまま轉載する。

去る十日午後十時頃牛込區市ヶ谷谷町一八六山手バス運轉手深津次郎介(二二)は自宅でカルモチンを飲み自殺をはかり附近の久能病院で手當中だつたが、回復したので取調べると、同人は昨年十月二十五日午後九時頃同區辨天町一六山手バス運轉中、誤つて同區喜久井町二九農林省屬佐藤芳雄氏を裸殺、過失致死罪として罰金七十圓を取られ、遺族とは四百圓の慰籍料で示談となつたが、その後夜になると佐藤氏の亡靈が現はれて、運轉が出来ず、去一月十日退社して、晝は方方の圓タクの臨時運轉手となつてゐたが、最近では行く先で亡靈に出會ひ、つひに神經衰弱に陥り、今月初めから自宅に引籠つてゐたが、責任感が昂じて自殺をはかつたものと判つた。

母親に逢ひに来た女

墓地と怪談はつきものだが、これも青山墓地にからまつた話である。夜遅く栗塚と云ふ運轉手が青山墓地を通つてゐると、壯い女がゐて集鴨中學の前までと云つて乗つた。其の自動車には助手がゐた。やがて集鴨中學の前まで往くと、其の女が、

「すみませんが、お母さんと呼んで来て下さいよ」

と云つた。家を聞くと、學校の前に入つた三軒長屋の眞中だと云ふので、早速助手をやつた。助手は云ひつけどほり往つて、三軒長屋の眞中の家をして、其處の主婦に逢つて話すと、

「へんねえ」

と云つて頭をかしげた。助手は狐にでもつままれたのぢやないかと思つて引きかへさうとすると、主婦は土室へおりて下駄を履き履き、

「うちの娘は、一昨日死んだばかりですよ、他に娘はゐないのですか」

母親はそれでも氣になると見えて、助手と同伴に自動車の停つてゐるところへ來た。自動車の中に

は女は見えないで、運転手がハンドルを握つたままで氣絶してゐた。

「おや、どうしたのでせう」

母親はそれから乗つて来た女の容貌や衣裳に就いて、ひととほり助手から聞いたあとで、

「それは、たしかに、家の子供ですよ、其の衣服は娘が好きで平生着てゐた衣服ですよ」

と云つて泣きくづれた。

芦屋の家へ歸る女

昭和九年の秋の比、流し自動車が京都の帝大の附属病院の前を通つてゐると、女學生のやうな姝な女の子が出て来て手をあげた。運転手が車を寄せて往くと、女の子は、

「芦屋まで」

と云つて乗つた。其處で芦屋まで往つたところで、女の子は御影石の門に前田某と標札を掲げた家の前で、

「此處よ」

と云ふので、車を停めると、すらりとおりて、

「お金を家でもらつて来るから、待つてよ」

と云つて其の家へ入つて往つたが、いくら待つても車賃を持つて来ないので、運転手は待ちくたびれて其の家へ往つて、

「今、お嬢さんに乗せて来ましたが、車賃を」

と云つて金を請求した。取次に出て来たものは婢であつた。婢は、

「家へはそんな方は来なはりませんが」

と云つて承知しない。そこへ主婦であらう五十位の肥つた女が出て来て、

「どんな容をしてをりましたの」

と云つた。運転手は女の風體を話して、

「桔梗のやうな花のついた袖の長い衣服を着てましたが」

と云つた。と、肥つた女は何かにおびえたやうな顔をしたが、

「さうでしたか、わかりました、おいくらですか」

と云つて云ふままに賃銀を拂つてくれた。運転手は肥つた女の舉動がへんであつたから、數日して

芦屋のことに精しい同僚に逢つたので、聞いてみると、前田の家には女の子が一人あつて、それが肺病で京大附属病院へ入院してゐたところで、其の運転手が病院の前で女の子を乗せて芦屋へ往つた日に死んでゐた。其の運転手はそれから間もなく發狂したとのことであつた。

自動車に乗る妖女

麻布の一ノ橋から金杉橋へ出て、其處から銀座の方へ往かうとしてゐた慎次は、赤羽橋まで來ると、急に思ひ出したやうにハンドルを廻して芝公園の方へ車をやつた。それはもう十二時を過ぎてゐた。辨天池の前まで往つたところで、後から來た一臺の自動車がすれすれになつて追ひ越して往つたが、其の車には毒どくしい緋のカーテンをおろしてあつた。
(なんだい、あれは)
病人でも送つて往くところであらうか、それにしてもあんな毒どくしいカーテンをかけるのはをか

しい。それに、病人を乗せた自動車にしてはスピードが早すぎるのであつた。
(をかした車だ)
慎次は不思議に思ひながら、芝山内の乗合自動車の停留場まで往つたところで、左側の街燈の下に立つて此方を見てゐる一人の女があつた。慎次はそれと見てブレーキをかけた。とたんに女の小さな手が微に動いた。

慎次の車はするすると女の前へ往つて停つた。慎次は體をねぢむけて、左手を後の扉にかけたまま女を見た。それは二十三に見える女給ふうの女であつた。

「自由ヶ丘へ往つてよ」

慎次が扉を開けると、女は其のまま車の中へ入つた。

「目黒の向うですね」

「さうよ」

慎次はもう車をやつてゐた。其の時向う側の交番の中から白い洋服を着た一人の巡查が、頭をかしげながら此方を見てゐたが、慎次は氣がつかかなかつた。車は赤羽橋を渡つて眞直に札の辻の方へ往つたが、まもなく右に折れて三田豐岡町から目黒へ往く電車通へ出た。そして、名光坂まで往つたところで、慎次の眼は往くともなしにバックミラーへ往つた。女はクッションに體をもたしたまま、臍脂

をつけた眞紅な口元をたらしなく開けてゐた。
車はいつのまにか目黒の競馬場を過ぎて鷹番の手まへまで往つてゐた。慎次はふと思ひ出したことがあつた。

「自由ヶ丘の、何處ですか」

女はやはり睡つてゐるのか何の返事もしなかつた。

(睡つてゐるのだな)

道は林につきあたつて大きく右にカーブしてゐた。ヘッドライトの光が、其のカーブの左側になつた林の中をちらちらと照した。と、後から慎次の首すぢを掴んでぐいと引つぱるものがあつた。慎次は驚いて振りかへつた。其處には眞紅な大きな口を開けて、今にも飛びかかりさうにしてゐる女の顔があつた。慎次はわつと云つて氣絶したが、其の拍子に自動車は傍の杉の木に激しい音をたてて突つかつた。

丸鬚の美女

其の運転手は新潟縣の者で、多になると東京へ出て来て、大崎でガレージを經營してゐる同郷人の許ではたらいてゐた。

昭和九年の事であつた。例によつて車を流して、麻布の筈町から青山三丁目へ脱けるべく、青山墓地の入口へさしかかつたところで、其處に一人の女がめて手を擧げた。それは丸鬚姿の夜目にもはつきり見える綺麗な縞柄の衣服を被た美しい女であつた。運転手は良い客と思つたのですぐ車を停めた。

「お乗りになりますか」

「すぐ其處の交番を曲つたところですよ、お幾何」

運転手は女客が淋しくて乗ると思つたので、足許へつけこんだ。

「一圓です」

女は鷹場に領いて乗つた。そこで運転手は更めて行方を聞いた。

「番地は」

「青山五丁目の某番の某と云ふ家ですが、交番で聞いてくださいよ」

やがて、交番の前へ往つたので、運転手は車を停めて交番へ往つた。そして、巡査から方角を教へられて引返してみると、客の姿が見えなかつた。運転手はぞうとした。そこで交番へ引返した。

「旦那、へんな事がありますよ」

「何だ」

「客があるのです、あれぢやないでせうか」

「痴な事を云ふな、今の世に、そんな物があつてたまるか、君がぼやぼやしてるから、行つちまつたのだよ、とにかく、今の家へ往つて聞いてみるがいい」

運轉手は氣もちがからりとしたので、近くへ車を持つて往つて探してみると、疑して其の家があつた。そこで叩き起して支關越しに聞いた。

「今、三十前後の丸鬚の方を、青山墓地から載つて來ましたが、お宅の方でせうか」

運轉手はそれにつづいて衣服の縞柄まで話した。すると家からそれに應じた。

「それなら、宅の嫁でございませうよ、二週間ばかり前に致くなつたのですが、それぢや、子供に會ひたくて來たのでせう」

間もなく支關が開いて小柄な年とつた女が出來て來て、手にした紙振をくれた。それには三圓入つてゐた。

其の運轉手はそれ以來、どんな事があつても青山墓地は通らなかつた。

白い小犬を抱いた女

某夜、某運轉手が護國寺の墓地を通つてゐると、白い小犬を抱いた女が來て車を停めた。そこで運轉手は女の云ふままに逢初橋まで往くと、女が、

「ちよつと待つてね」

と云つて、犬を抱いたままおりて、傍の立派な門構の家へ入つて往つたが、一時間近くなつて出て來ないので、運轉手はしかたなしに其の家へ往つた。すると一人の老婦人が出て、

「私の家には、女の子はゐないのですが」

と云つた。運轉手はそれでは乗り逃げをせられたのかと思ひながら、やるともなしに土間へ眼をやつた。土間には彼女が抱いてゐた小犬がちよこなんと坐つてゐた。

「此の犬を抱いて來た方です」

すると老婦人の顔色が變つた。

「此の犬を、此の犬ですつて」

そこで運轉手はひとほり其の女の容貌を話した。みるみる老婦人の眼に涙が湧いた。「それでは、やつぱり家の娘でございますよ、明日が一周忌になりますから、それで歸つて来たものですよ」

老婦人はそれから土間へおりて其の小犬を抱きあげた。

通夜の晩

雨の夜の二時過、麻布へ客を送つて往つた自動車の運轉手は、その歸途に、平生のコースをとつて青山墓地の並木路へさしかかった。と、傍の墓の陰から出て来た壯い女が、自動車を遮るやうにして、

「芝の西久保までね」

と云つた。運轉手は何となく鬼魅が悪かつたが、しかたがないので、女の云ふままに巴町へ往つた。そして、唯ある横町の板塀をめくらした家の前まで往つたところで、女は、

「此處でいいから、待つてね」

と云つて、車をおりて其の家の中へ入つて往つたが、いつまで經つても出て来ないので、運轉手は痺をきらして其の家へ往つた。其處には何か取りこんでゐることでもあると見えて、家の中で數人の氣配がしてゐた。そこへ四十前後の品のある女が出て来たので、

「今のお嬢さんは」

と云つて理由を話すと、其の女が、

「どんな容をしてました」

と云ふので、運轉手は、

「繪羽織を被てたやうですが」

と云つて記憶のままを話すと、女は狂人のやうになつて、

「まあ娘か、娘か」

と云つて泣きだした。事情を聞いてみると、一人娘が前夜投身自盡をしたので、親戚の者が集まつて通夜をしてゐるところであつた。運轉手はこれも何かの因縁だらうと思つて、其の夜は其處で通夜をして、翌朝になつて歸つて来たが、それから一箇月はかり、精神病者のやうになつてぶらぶらしてゐた。

濠端の怪

濠端の柳に糸のやうな雨が煙つてゐる夜であつた。平生のやうに自動車をながしながら、四谷見附の方へ来た某は、其處の電柱の傍に人影を見つけた。それは十七八に見える女の子で、それが傘もささないでしよんぼり立つてゐるところであつた。某はブレーキをかけるなり、顔を窓際へやつて聲をかけた。

「いかがです」

すると女はちらと白い歯を見せて寄つて来た。

「何方へ」

某は扉をあけながら女の方を見た。女は風のやうに内へ入つて、

「とう京驛へ」

と云つた。顔を帯びた消え入るやうな聲であつた。

某は何だか厭な氣もちがしたが、女の云ふままに東京驛へ車を走らせた。そして、東京驛の乗車口へ車を乗りつけて、

「お待ちどほさま」

と云つてルームを揮りかへつてみると女の姿はなかつた。某は顔ひあがつて己のガレージに歸り、車の中を調べたところで、女の腰かけてゐたあたりのクッションが、水でもかけたやうにびつしよびしよに濡れてゐた。

終電車に乗る妖婆

怪談も生活様式の變化によつて變化する。駕籠ができれば駕籠に怪しい者が乗り、人力車ができれば人力車に、鐵道馬車ができれば鐵道馬車に、汽車ができれば汽車に、電車ができれば電車に、自動車ができれば自動車に、飛行機ができれば飛行機に、怪しい者が乗るのである。大正十三年の春の比芝字田川町を経て三田の方へ行く終電車があると、風呂敷を背負つて、息をせかせかとさしてゐる六

十位のよぼよぼの婆さんがひよいと乗るので、車掌が切符を切らうと思つてゐると、大門と金杉橋の間あたりですうつと消えてなくなるのであつた。これは神明町の下駄屋の婆さんが其の前年の暮、貸してある烏金を取立に往つての歸りに、宇田川町の鳥屋の前で電車に轢かれて死んだが、其の婆さんの財布には三十圓の金が入つてゐた。芝から麻布方面では金に未練のあるお婆さんの怨霊が電車に乗るのであらうと云つて評判した。それに大門と金杉橋の間は電車の事故の多い處で、電氣局でも之を氣にして、宇田川橋の橋の袂に無縁塔を建立すると云つてゐたがどうなつたことやら。

善方寺の符籙

秋田市の北を流れてゐる雄物川、其の川は海が荒れたり雨が降り續いたりすると、水が充満になつて兩岸の堤防を越すほどになるので、心ある者に恐怖を與へた。

明治四十四年比、森正隆が知事をしてゐる時の事であつた。其の時一隻の軍艦が来て、雄物川の沖あひ二里の處に碇泊した。秋田市は元より附近の人びとは、それを參觀しようとしたが、折柄荒天で

波が高いので、往く事ができなかつた。

秋田中學校の短艇部の學生は、短艇部の意氣を見せるは此の時とばかり、二隻の短艇を漕ぎ出して參觀に往つたが、それにはそれぞれ十名の學生が乗つてゐた。

名だたる日本海、黒みだつた沖あひから寄せて来る波は、鬼魔が齒をむいたやうに白く大きく敲つてゐた。

前へ往つてゐた短艇は、傍視も振らず一直線に其の波を切つて突き進んだので、無事に沖あひに出る事ができたが、後の短艇は川口の波の敲りに怖をなして、舵を斜にしたので、忽ち波のあふりをくつて、あつと云ふまもなく顛覆してしまつた。

それと見て海岸は大騒ぎになつた。救助船を後から後からと出して、遭難者の救助に努めた結果、七名だけ救助して後の三名は行方不明になつた。其の三名のうちの一人は、秋田きつての富豪の子息であり、後の二人は角田と云ふ家の兄弟の學生であつた。角田兄弟は秋田中學校の水泳部の選手で、水泳は同校きつての熟練者であつた。

秋田市は全市をあげて騒いだ。捜査は徹宵續けられた。それには市長は元より知事まで出張してゐたが判らなかつた。

遭難の學生の生存の望みは絶えた。此のうへは死體でもと云ふ事になつて捜査を續けた。秋田中學校

の校友は、一里おき位に海岸へ天幕を張つて、其の捜査に力を添へたが、二週間ばかり経過しても其の死體はあがらなかつた。

遭難者の家では他に手のくだしやうがないので、善方寺の符録と云ふことになつた。酒田港の善方寺は船員の信仰する寺で、海上で遭難して死體のあがない時は、其處の符録を流せば、死體の在所が知れると云はれてゐた。

そこで善方寺へ往つて符録をもらつた。符録は經木のやうな札を五六枚束ねた物で、それには一枚一枚梵字を書いてあつた。符録をもらつた者は、やがて秋田へ歸つて、雄物川の口へ舟を乗りだし、遭難の場所へ往つて流したところで、符録は左へ左へと流れて、やがて東が解けてばらばらになつた。符録のばらばらになつた處に死體がある事になつてゐるので、其處へ網を入れてみると果して死體があつたが、それは三人の死體でなしに角田の兄の方の死體であつた。そして他の二名の死體は其の後になつて離ればなれにあがつた。

箱を背負つた女の姿

秋田の雄物川の川口には、平生荷物船が船がかりしてゐるので、菓子や餅の類を賣りに往く者があつた。

某時梅雨で川の水が充滿になつてゐる時、物賣の女の一人が、餅によつて長方形の大きな菓子箱を背負つて、菓子を賣りに往つたが、荷物船は船を破損しないやうに岸からはなれて船がかりしてゐるので、それに往くには僅な距離であるが、解に乗らなくてはならぬ。

其の女も解に乗つて櫃を漕いで往つたが、流れが早いので自由が利かず、解はみるみる押流されて、荷物船から岸の方へ張つた綱の下へ入つて、體を綱に弾かれ、川の中へ落ちて溺死した。

其の女には所天もあり子供もあつたが、貧しい家で一家は女のかせぎでやつと生活してゐたので、後の者は困つてしまつた。

土地の者で其の家の事を心配してゐた者が、某夜其の前を通つてゐると、家の前の縁臺に何人かゐるやうであるから、聲をかけようとして見ると、大きな箱を背にして腰をかけてゐる者があつた。それは溺死した彼の女の髪も衣服もびしよ濡れになつた姿であつた。

焦土に残る怪

昭和九年三月二十一日の函館の大火は、其の日の午後六時から翌朝の七時まで燃えやぶけて、焼失家屋二萬四千戸、死傷者三千人を出したが、其の時火に追はれた市民は、猛火の中をくぐつて安全な場所から場所へと逃げ廻つた。しかし、風速三十メートルの烈風に煽られて猛火の中では、どうすることもできなかつた。

山から海へ、避難民は續々としておしかけたが、其處でもまた猛火に包まれて焼死する者、或は海に入つて溺死する者など、其の惨状は全く眼のあてられないものがあつた。

其のうちでも最も烈しかったのは、函館市の東南になつた大森濱であつた。従つて此處には、多くの哀話とともに鬼魅悪い話が残つてゐる。

深夜の海岸には、何處からともなくむせぶやうな、泣くやうな聲が聞えて来る。青い鬼火が、其處にも此處にもふはふはと浮んで、それが烈しい勢で町の方に飛んだり、焼け残つた樹木の枝や電柱にあたつてばらばらとくだけた。

警官の一人が巡廻してゐると、眼の前へ髪をふり亂した女が出て來たが、其の女は生れて間もない

嬰兒を負ひ、兩手に幼い子供の手を曳いてゐた。女は蒼白い顔を星の光にちらつかせながら、子供の手をぐいぐいと曳いた。

「おう、あついか、あついか」

女の足は早くなつた。

「もうすこしぢや、あついか、もうすこしぢや」

其の時背の嬰兒がひいひいと云ふやうにないた。

「おう、おう、おう」

女は狂人のやうになつてゐた。

「あついか、おう、あついか、もうすこしの、しんばうぢや」

女は其のまま海の方へ往つたが、みるみる其の姿は海の中へ消えて往つた。

これもやはり函館の大火が生んだ怪談である。某運轉手が自動車をあやつつて深夜の海岸を走つてゐた。其處は根崎海岸のドライブ道で、道幅もかなり廣いし、それに障礙物がないので、運轉手はい氣もちになつてスピードを出してゐた。

と、其の車の前にふらふらと飛びだして來たものがあつた。運轉手ははつとして、機械的にブレー

ギをかけた。車は其の怪い物の数間てまへでやつと停まつた。其處にはヘッドライトの燈に照らされて角巻をした壯い女がゐた。女は何者かに追はれてでもゐるやうに非常にあわててゐた。

「助けてッ」

女は蒼白い顔に髪をふり亂してゐた。

「助けてッ」

女の聲がまた聞えた。それを見ると運転手は捨てておけないのでいきなり扉を開けた。

「どうした、どうした」

運転手は其のまま女の傍へ往つた。運転手は女を車へ乗せて女を追つてゐる悪漢の手から救はうとした。運転手は怒鳴つた。

「さあ、車だ」

それとともに女をつかまへようとする、女の姿は煙のやうに海のはうへ消えて往つた。

海嘯のあと

壯い漁師は隣村へ用たしに往つて、夜おそくなつて歸つてゐた。其處は釜石に近い某と云ふ港町であつたが、数日前に襲つて來た海嘯のために、此の港町も一營にせられてゐるので、見るかぎり荒涼としてゐる中に、點點として黒い物のあるのは急ごしらへの豚小屋のやうな小家であつた。それは月の明るい晩であつた。壯い漁師は其の海嘯のために娶つたばかりの女房を失つてゐたが、心の顛倒がまだ収まらないし、それに女房を失つた者もさらにあるので、一種の群集心理でそれを諦めてゐた。

(みんな、同じことだ)

それでも若い漁師は、其の女房がまだ何處かに生きてゐて、ひよつこりと歸つて來さうに思はれた。

(運ちや、運かよかつたら、助からんこともない)

浪の音が穩にざあざあと云ふやうに聞えて來た。それとともに、彼の靜な海がどうしてあんなになるのだらうと思つた。其の考へはやがて海の上を駛つてゐる船へ往つた。

(何かにつかまつて、泳いでゐるうちに、助けられたかも知れない)

さうだとすると、五日や十日では判らない。壯い漁師は小づくりな黒味の多い細君の顔を眼前に浮べながら歩いた。

道の兩側になつた樹木の枝には、凄惨な海嘯の日の光景を思はずやうに、ぼろぼろになつた衣服や

繩ぎれが引つかかつてゐた。それを見ると壯い漁師の心は暗くなつた。

(いくらなんでも、これぢや)

町の後になつた丘の中腹には、海嘯のために持つて往かれた發動機船や帆前船が到る處にあつた。

(やつぱり死んだのか)

壯い漁師は溜息をついた。と、其の眼の前へふらふらと寄つて來た物があつた。それは向うから來た女で、壯い小づくりな其の顔が月の光に浮んでゐた。

「おう」

壯い漁師は飛びつくやうにして女のはうへ往つた。女は眼に黒味の多い女房であつた。

「生きてたのか、おまへは」

壯い漁師の心は歡喜に顫へてゐた。

「おれは、あれから探しまはつた」

壯い漁師は夢中であつたが、其の女は其のままするとすれちがつた。

「おい、何處へ行く」

壯い漁師は彼の騒ぎのために氣が狂つて己の顔を忘れてゐるのではないかと思つた。

「おい、俺だよ、おれだよ」

壯い漁師は女房の名を呼んだ。

「——、家は其方ぢやない、どうしたのだ」

壯い漁師は女房の肩に手をやらうとした。と、女はちらと揮りかへつた。そして、所天の顔を見て莞としたが、其のまままた見えなくなつた。

月光の下

空には清光のある夏の月が出て、其の光に染められた海は廣びると蒼白い牆がりを持つて靜かに湛へ、數日前大海嘯を起して、數萬の人命を奪つた恐ろしい海とは見えなかつた。

其處は陸中の某海岸であつた。一人の壯い漁師は砂丘の上に立つて、悲しげな眼をして海のはうを見おろしてゐた。漁師は同棲したばかりの女房を海嘯のためにさらはれた者であつた。双方で思ひ合つて男の方では親が不承知を唱へ、女の方でも親類から故障のあつたのを、やつとの思ひで押し除けるやうにして、夫婦になつてゐたのであつた。

漁師は其の二晩三晩海岸に出て、月の光の下に擴がった海を見入つて、絶え入るやうな思ひで女房のことを思つてゐた。それは風の無い夢の中のやうな夜で、後から後からと膨らんで来て、微白く磯に崩れてゐる浪にも音がなかつた。

海嘯の起つたのは、陰曆の五月五日の夜であつた。まだ陰曆で年中行事をやつてゐる僻遠の土地では、其の日は朝から仕事を休んで端午の節句をやつてゐた。壯い漁師の家でも隣家の者が二三人集まつて来て、夕方から酒を飲んでゐた。と、沖の方で大きなたとへば大砲を打つたやうな物音がして、それがどしりと地響きをさした。戸外に出て海の方を見てゐた村の人の某者は、冥濛な海の果に當つて、古銅をひきちぎつたやうな雲が浮んで、それに雷光がざらざらと燃えつくやうになつたのを見た。海嘯は其の後からすぐ湧起つて、家も人も一呑みにした。壯い漁師は、赤い手柄をかけた女房を引つ抱へるやうにして裏口へ出たが、白い牙を剃き出して飛びかかつて来た怒濤に捲き込まれて、今度氣が注いだ時には、一人になつて流れ行く松の枝にかきついてゐた。

漁師の眼には涙が湧いてゐた。彼は其の涙の眼をまた海の方へやつた。と、磯の波打際に人影の動くのが見えた。それは海の中からあがつて来たやうに、眞直に此方へ向いて歩いてゐた。そして、次第に近づいて来るのを見てゐると、其の姿はどうも女らしかつた。長い青光のする頭髮は亂れて、それが肩に靡いてゐるやうに見えて来た。漁師は不思議に思ひながら、ちつとそれを見つめてゐると、

それが女房のやうに見えて来た。漁師は眼を睜つた。それはたしかに女房の姿であつた。微白く見える顔も、肩の恰好も、背たけも、歩き方も、皆懐しい女房であつた。漁師は嬉しさがぞくぞくこみあげて来た。彼は砂丘を走りおりて近づいた。それは波にさらはれたままの紺飛白の單衣を着た女房であつた。頭髮も衣類もぐつしよりと濡れてゐた。

「おう、歸つて来たか、俺は、お前のことを、どんなに心配してゐたか判らないぞ、よう歸つて来た」と、漁師は嬉しさに聲が纏れた。

女は顔をあげて、漁師の顔を一眼見て、何も云はずにちらと悲しげな表情を見せて、雙手を膝のあたりに重ねるやうにしてお辭儀をした。漁師は不思議に思つて、女の手にかけようとした己の手を引込めた。と、女は其のまま歩きだして、沙丘にのぼりかけた。

「お葉、どうしたのぢや、お葉」と漁師は驚いて其の名を呼びながら、後から跟いて往つた。

女は沙丘を越えて、己の家の方へ歩いて往く。漁師は其の後を歩きながら、海に長くゐたために體が悪くなつて聲が出ないので、それで急いで家へ歸つて、氣を落ちつけて話をするつもりだらうと思つた。しかし、家は海嘯のために持つて往かれたので、其の跡へ假小屋をこしらへて住んでゐるか、女房は驚くたうとも思つた。

村は荒涼としてゐた。松林の松は倒れ、畑は河原のやうになつてゐた。女は倒れた松の間を潜つて

歩いた。そして、己の家の前の方へ往つたが、其の方へは曲らずに其のまま通り越してしまつた。

「何處へ往く、我家は流れたから、小屋がけをしてをる、此處ちやよ」と、漁師は云つた。

女は聞えないのか背後も向かなかつた。

「何處へ往く、何處へ往く、我家は此處ちやないか」

女はそれでも背後を向かなかつた。漁師は不思議でたまらなかつたが、何か理があるだらうと思つて、跟いて往つた。

月は傾いて四邊の物の影が多くなつてゐた。女は其の中をひらひらと蹺音もさせずに歩いた。

樹木の茂つた小高い臺地が來た。其處は村のはづれになつてゐた。臺地の上へは一條の小徑がついてゐた。女は其の臺地の下へ往くと、ふと姿を消した。

「お葉、お葉、お葉」と、漁師は驚いて附近を探して歩いたが見つからなかつた。

漁師はつつたつたまままで聲をあげて泣いた。

朝三入伴の村の者は、臺地の下で悲しみ沈んでゐた壯い漁師を見つけて聲をかけた。壯い漁師は白と明けた朝の光が眼に入らないやうな風で、ちつと人びとの顔を見てゐたが、

「女房が歸つて來て、此處まで來ると見えんやうになつた、探してくれ」と悲しげに云つた。

人びどは眼を見あはした。

「それは、お前が、あまり思うてゐるから、夢を見たらうが、もう諦めて我家へ歸るが好いと、其のうちの一人が云つた。」

壯い漁師は間もなく發狂してしまつた。これは明治二十九年六月十五日の三陸の海嘯が生んだ怪談の一つである。

骨壺が踊る

大正十二年、小林と云ふ某雑誌の記者は、淀橋柏木の某所に堂堂たる空家を見つけて、家賃も割合に安いところから、すぐ借り入れて移轉した。それは五月であつたが、六月になつて某夜細君が獨り留守居をしてゐると、變に睡氣がさして來たので、うとうとしてゐると、傍の食卓の上へ骨壺が載つかつて來て、それが踊るやうに動きだした。細君はびつくりして眼を開けた。眼を開けると、別に何

もなかつたが、翌晩になつて又獨りであると、又彼の骨壺が食卓の上に見れて踊つた。骨壺の踊は細君の夢に三回現れた。其の時細君は、魚の骨の始末に困つて、庭前へ埋めるつもりで、小さなシャベルで庭の土を掘つたところで、一つの甕が出て来た。不思議に思つて蓋を除つてみると、中に骨壺があつたが、それは細君の夢に見た骨壺そっくりであつた。あまり不思議であるから、近くの物識に訊いてみた。物識はそれに附いてゐた定紋によつて、

「これは前にゐた人の物だ、前の主人は鐵道省の參事をして、夫人は大鳥家から來てゐたが、主人と女中の關係から離別になつて、それから主人は女中と同棲してゐたが、間もなく病氣で歿した、當時其の女中が、主人の骨をどう處分したか略にのぼつた事があつたが、それに違ひない」と云つた。其處は場所が四谷に近い處から、附近の者は新四谷怪談と云つて納涼臺の話題にした。

同行する怨靈

此の話は當時の新愛知にも掲載せられた事件であるが、昭和元年の二月十二日の夜、大垣市傳馬町

の自轉車店へ強盗が入つて、熟睡中の店主福野信行を殺害したので、警察では必死になつて捜索した結果、市外今村町の精米屋の次男安田治郎を眞犯人として檢擧した。

其の安田が檢擧せられたのが、被害者福野の百箇日の命日であつた。そして、岐阜地方裁判所で公判に附せられたが、安田の辯護人桐山辯護士が刑務所で安田と面接した時、安田は桐山辯護士に向つて怪奇な話をした。それによると安田は、兇行後一箇月の後に、東海道線米原驛前の某旅館へ晝食に入つたところで、婢が二つ膳を持つて來て、一つを安田の前へ置き、一つを其の左側へ置いた。安田は變に思つて、

「一人來てるのに、何故二つ持つて來るのだ」

と云ふと、婢は怪訝な顔をして四邊を見まはしながら、

「何處かへ往らしたのですか」

と云つた。安田は不思議でたまらない。

「往らしたつて、何人が往くのた、一人ぢやないか」

「だつてお二人で、おあがりになつたぢやありませんか」

「一人來てるのに、どうして二人である」

「へんねえ、確に二十五六の方ですよ、お友達でせう」

「二十五六、どんな顔だ」

婢の云つた顔の恰好は、被害者福野に類似であつた。安田は恐ろしくなつて其のまま其處を逃げだした。

安田は斧で福野の頭部を粉碎して殺害したものであるが、其の際飛び放つた血が安田の右の腕に附着して、幾何洗つてもこすつても除れなかつたところで、擧げられて犯行を自白すると同時に綺麗に除れてしまつた。

安田にからまる怪異は、其の二つであるが、福野の家にも一つの怪異があつた。それは福野が殺害せられて一週間位しての事であつたが、福野の兄の政行と親戚の川瀬吾市の二人が福野の家へ行つてゐると、隣の疊の上へ置いてあつた鐵瓶が躍るやうに動きだして、十分位もことごととやつたので、二人は驚いて外へ逃げだした。

お初地蔵

東京浅草區新福富町、現在の壽町一丁目十番地に三軒長屋があつて、其の一軒に松村關藏と云ふ貧しい男が住んでゐた。

それは大正十二年七月七日の事であつた。關藏の家にお初と云ふ八つになる養女がゐたが、それが其の晩から何處へ往つたのか行方不明になつた。

其のお初と云ふのは手癖が悪くて、自分の家は元より、近所の小錢を盗んだり食物を盗んだりするので、關藏も持てあまして、女房と二人で何時も折檻したが、其の都度お初の泣き叫ぶ聲が聞えるので、近所でも、

「また、何かやつたのだよ」

と云つて笑つたものだが、それが七日の晩からゐなくなつた。近所の者は不審に思つて、女房に聞く、

「昨夜、又盗み喫ひなんかするものだから、叱つてゐると、何處かへ往つちまつたのですよ、今に歸つて來るのでせうよ」

と云つて済ましてゐた。女房は金崎巻と云ふ内縁關係の者であつた。近所ではそれに就いて、

「彼の晩、酷い目に逢つてるやうに、例の調子で泣いて、それがばつたり聞えなくなると、彼處の猫が厭な聲で泣いたのですよ」

と云ふ者もあれば、

「彼の兒は飯を食べさせないから、平生猫の飯を喫つてゐたと云ふちやありませんか」

と云ふ者もあつたが、三日しても四日してもお初の姿が見えないので、噂は深刻になつて來た。

「變ぢやないの、をかしいぢやありませんか」

「彼の猫の泣聲が、徒の泣き聲ぢやなかつたよ」

噂は噂を生んで警察の知るところとなつた。警察では怪しいと睨んで材料を蒐集した結果、横山、坂本、振旗と云ふ三人の刑事をやつた。

曇つた蒸し暑い日の夕方であつた。横山刑事が先にたつて關藏の家の土間へ入つて往つた。狭い家の内は灰色に暮れかけてゐたが、土間へ入るなり何かしら厭な氣もちがした。

其の時關藏と卷の二人は、小さくなつて坐つてゐた。そこで横山刑事が、

「おまへが、杉村關藏か」

と云つた時、關藏夫婦の背後へぼうとした物の影が映つた。横山刑事はそれと見て悪感をかんじるとともに、たしかに養女は關藏夫婦にどうかせられてゐると思つた。横山刑事の一行は、躊躇せず夫婦を檢擧した。そして、取調の結果、夫婦は犯行を自白した。それによると、お初が又なにかしたので、例によつて折檻するため、逆しまに吊して、撲つてゐるうちに絶息した。夫婦は驚いて介抱し

たが蘇生しないので、しかたなしに死體を細断して床の下へ埋めたものであつた。

それと知つて附近の者は、石地蔵を作つてお初の冥福を祈つたが、翌年の大震災で附近は焦土となつたので、その地蔵は駒形某寺に移されてゐるとの事である。

杖を置いた音

これは鶴岡市の杉村幹君の話である。杉村君は明治四十四年、仙臺の第二高等學校へ入學したが、其の時杉村君は、同郷の先輩東野政造君が光禪寺通にゐたので、其處で厄介になつてゐた。杉村君は其の時、東野君の母堂壽井さんから次のやうな話を聞いた。

それは東野君のお父さんが郷里山形縣東田川郡役所の郡書記を勤めて、藤島村に住んでゐた時の事であつたが、其の夜は雪が降つて、良人は不在で、壽井さん一人が自分の室で髪を梳いてゐた。と、玄關の方でぱたんと云ふ杖でも置いたやうな音がして、それに續いて何人かあがつて來るやうに廊下に足音がして、自分の室の方へ近づいて來たが、別に何人も入つて來なかつた。壽井さんはぞつとし

て體が粟だつたやうに思った。それと同時に鶴岡の親戚の三宅と云ふ家の老婆の事が頭に浮んだ。其の老婆は長い間病床にゐるのであつた。そこで壽井さんは、中一日措いて鶴岡へ老婆の見舞に往つた。

老婆は衰弱が加はつてゐたが、それでも無事であつたから壽井さんは安心した。老婆はひどく喜んで壽井さんの顔をしげしげと見た。

「壽井さんか、良く来てくれたね、わたしは、お前に逢ひたくて逢ひたくてたまらないから、一昨日の晩、お前の家へ往つたよ、お前は一人で髪を梳いてゐたぢやないか」

寫眞に映つた登山姿

昭和八年の夏、大阪市の樟蔭女學校の朝輝教授が槍へ登つた時のことである。其の時教授は、氷河のクレヴァスが面白いので、それをカメラに收めて歸り、結果を楽しみしながら現像してみると、其のクレヴァスの下に、襦袢にリュックサックを背負つた登山姿の青年が映つてゐた。カメラに收め

た時には確に人もゐなかつたので、教授は不思議でたまらなかつた。しかし、其の時は數本のフィルムを使つてゐるので、他のフィルムかも知れないと思つたが、氷河のクレヴァスを撮つたのは一枚しかないし、場面も己が覗つたとほり映つてゐるので、決して他のものではない。が、それにしても登山姿の青年がへんである。教授が不思議な謎に惱まされてゐる時、友人が遊びに来たので、其の話をして印畫を見せたところで、友人が眼をみはつた。

「君、これは、B君だよ」

B君といふのは、大阪商科大学の學生で、其の前年槍で遭難して腐爛死體となつて發見せられてゐる者であつた。朝輝教授の登つたのは、B君の遭難してからちやうどまる一年目であつたから、教授はますます不思議に思つて、某日B君の家へ往つて其の印畫を見せた。すると家人が、

「たしかにさうです」と云つて泣いた。

御嶽登山の記念寫眞

大正十二年の事である。品川に島田と云ふ洋服屋があつたが、其處に九つと二つの二人の男の子があつた。夫婦は仲も好くて、大變子供を可愛がつてゐたところが、其の二人の子供が突然疫癘に罹つて相次いで歿くなつた。

島田君はそれがために心境に變化を來たして、木曾の御嶽に入つて信心を始めた。其の島田君が大正十三年の夏、御嶽の頂上の奥の院、海拔九千五百尺の所で、御嶽へ出張して登山者の撮影をやつてゐる寫眞師に、記念撮影をさして、後から送つて來たのを見ると、島田君の後の方に、九つになる男の子が二つになる弟を抱いてゐる姿が映つてゐた。此の話は松井桂陰氏の話で、筆者は松井氏から其の寫眞を見せられた。

幽靈寫眞

大正十三年、東京市深川區富川町三十一番地に、中村三藏と云ふ人が住んでゐたが、其の三藏には久吉と云ふ十二になる男の子があつた。それは末子でもあつたし、利發でもあつたから、非常に可愛

がつてゐたところで、暮から病氣になつて翌年の五月十六日に歿くなつた。三藏夫婦は泣きながら佛式によつて葬式をしたが、氣がすまないので三十日後になつて、天地教院と云ふ神道の教會へ依頼して、神式の靈祭を行つてもらひ、それを靈匣に納めて床の間へ置いてあつた。

ところで、それから九日して、他家へ養子に仕つてゐる三藏の次男某が來た。某は寫眞道樂で寫眞機を持つてゐたので、父の三藏と、三藏の妹で高澤姓を名乗つて良久と云ふ叔母などを撮影して、自宅に歸つて現像してみると、それには各自不思議な物が映つてゐた。まづ良久の寫眞には、白衣を着て頭陀袋を掛けた少年の姿がぼんやり映つてゐたが、よく見ると久吉の姿であつた。

其のうへ床の間の靈匣に向つて左の方に、半身を靈匣に凭して、髪を黒い白紋付の着物を見た婦人の姿が映つてゐた。それは年輩と云ひ容姿と云ひ、三十六で歿くなつた三藏の母であつた。

また他の者にシャツターをきらして、自身と父の三藏を撮つた寫眞には、白髪の老婆の姿がありありと映つてゐたが、それは三代程前に六十五で歿くなつたと云ふ老婆であるとのことであつた。

此の幽靈寫眞の事は、當時非常に評判になつて都新聞などにも書きたてられた。

死兒の寫眞

大正九年の事であつた。日光麗沼驛から一里ばかり離れた一部落に、山本道太郎と云ふ人があつて、其の娘が流行性感冒で歿したつたが、歿したつて間もなく道太郎の夢に其の娘が現れて、
「お父さんが寫眞を撮つてくれますと、わたしが寫りますから、それをお母さんに見せてやつてくだ
さい」
と云つた。そこで道太郎は、翌日麗沼町へ往つて、寫眞を撮つたところで、果して娘の姿が寫つて
ゐた。

レンズに現れた女の姿

保土ヶ谷の某寺の僧侶が寫眞を撮る必要があつて、横濱へ往つて寫眞屋へ入り、レンズの前へ立つ

てみると、寫眞師は機械に故障が出来たからと云つて撮影を中止した。

僧侶はしかたなしに次の寫眞屋へ往つて、レンズの前へ立つたところで、どうした事か其の寫眞師も、レンズに故障が出来たと云つて中止した。僧侶はよく故障が出来るものだが、どうした事だと獨言を云ひながら、又次の寫眞屋へ往つた。そして、又レンズの前へ立つたところで、又機械に故障が出来たと云つて謝絶された。僧侶は業をにやして、

「何故そんなに、機械に故障が起るのだ」

と云つて詰問すると、寫眞師は、

「あなたは、かうしてみると一人だが、黒い布を被つてみると、後へ女の顔が出て来る」

と云つた。そこで交渉の結果、警官を呼んで来て、警官の手で撮影してもらひ、出来あがつたところを見ると、僧侶の頭の上へ髪を振り亂した女が坐つてゐた、警察では奇怪至極とあつて内務省へ報告した。其の報告書は内務省に現存して、浅野正恭翁も一讀したと云つて、筆者は浅野翁からそれを聞かされた。そして、寫眞に現れた女は、其の僧侶の先妻であつたが、其の先妻が病氣で歿した時、後妻をもらつてくれるなど遺言したが、僧侶がそれを守らなかつたので、其の怪異が起つたものであつた。

ブロッケン山の幽霊

古い新聞の切抜を見ていると、昭和十年七月の名古屋新聞に、ブロッケン山の幽霊の記事があつた。「中部日本のハイキング好適地として知られた長野県下伊那郡智里村富士見臺高原に、ブロッケン妖怪と稱する珍奇な現象が現はれて興味をそそつてゐる。

これは山上に立つて雲海を望むと自分の投影が數千尺の大入道となつて雲に映じ、頭から五彩の後光を放つて一分間乃至三分間くらくら継続するものである。

飯田商工會議所では、見物團體を募集して、八月四日出發し、一泊の豫定で、この山上の妖怪に接する計畫を立ててをり、また下條村出身の日本畫家龜割隆志氏も、今夏登山してこの現象を彩管に納めて、帝都に紹介することとなつた。

これは古くから獨逸のブロッケン山で見られた現象で、ブロッケンの幽霊と云ふのであるが、日本でも高山へ登つて日の出を見る者は、時としてその現象を見る事がある。それは日の出を見てその莊嚴さうたれた時、眼を轉じて背後の方を見ると、朝霧の中に大きな大きな入道の姿を見、又信仰的

な御來迎を拜むと云ふやうな者には、阿彌陀如來の姿が現はれるが、之は日の出の陽光が光源となつて、登山者自身の影が濃霧に映り、それが大入道となり佛體となるのである。

春の初め比、一時的な現象で急に暖かになつて、濃霧のかかつた晩などに、窓を開けて電氣スタンドを座敷の中央に置き、窓際へ往つて腰をかけてみると、彼のブロッケンの幽霊を見る事ができる。尤もそんな時は、光源が弱いから極めてぼんやりした幽霊であるが、それでも大ききだけは素晴らしく大きいのである。

セントエルモの火

昭和九年七月十三日の夜、富士山の頂上にセントエルモの火が現はれた。それを見たのは富士山頂高層氣象觀測所にゐた沼津測候所の勝亦技師であつた。勝亦技師が新聞記者に語つたところによる

と、
「去る十三日夜八時三十分から九時二十分まで、五十分間継続したエルモは、嘗て筑波山と伊吹山に現れて目撃者を驚かしたもので、富士山としては非常に珍しい現象である、同夜は雷雨が相當激しく、倉庫の屋根、風力計、風信機、日照計などに、薄紅白の柔かな光の長さ五ミリを認め、蠟燭の火のゆれる如き有様を呈した。そして、火の光は電光がひらめいてゐるうちは消え、やめば柔かな光を發してゐたが、今度のは筑波、伊吹などのエルモと異なり、棟木などに光が廣い範圍に現れたのが特徴であつて、頭髮などにも多少この現象を認めた。

此のセントエルモの火は、高山に時折見る現象で、霧や雪の關係で、空中に電位差が生じた場合、その邊にある物體の先端が美しい放電作用を起すもので、人間の髪の毛、木の梢等からバチバチと一二寸の火花が飛ぶが、別に危険な事はない」とのことであつた。

二

昭和十三年二月十七日午後二時比から、岐阜縣一圓に猛吹雪が襲來して八寸も積つたが、其の夜八時五十分から十分間にわたつて、屋根と云はず電柱と云はず、其他避雷針、アンテナなどから一寸位

の紫色の焰が立昇つて、それがピリピリと云ふ小さな音を立てたので人人は驚いた。
それはセントエルモの火と云はれてゐるもので、高い山の上で時たま、時たまと云つても年に一度か二度位現はれるものであつて、平地では見られない現象である。それは地上と空中との電力の差が甚だしい時に起る放電作用で、一種の雷のやうなものである。
焰は紫色が普通で、それは何萬ボルトと云ふ電力の物であつて、電氣の流れが遅いために、人體には別に危険はないが、同夜のやうに平地に明瞭見られたのは、日本最初の事であらうと岐阜測候所では云つてゐるが、岐阜市はそれがために電車が停電した。

ヒマラヤの妖婆

山の權威者榎谷徹藏氏の話である。――

一九三〇年に、英、獨、瑞、澳の國際探検隊が、ヒマラヤの第三高峰カンチエンジュンガに登つた時、其の一行に加つてゐたスマイス氏の報告によると、一行は其の時二萬一千呎の地點に穴を掘つ

てキャンプしてゐた。それは秒速百メートルと云ふ烈風の吹きすさんでゐる夜であつたが、其の時、半白の頭髮を振り亂した物凄く一人の老婆が来て、スマイスの上に馬乗りになつて、ぐんぐんとおさへつけるので、驚いて跳ね起きてみると、それは夢であつた。そして、朝になつたところで、一行がいづれも蒼い顔をしてゐるので、

「どうしたのだ、顔色が悪いぢやないか」

と云つて聞いてみると、皆が云ひあはしたやうに妖婆の夢を見たと言つた。其の夜をはじめとして、一行は其處で数日間、氣壓と妖婆の夢に悩まされてゐたが、やがて出發して、二萬一千呎以上の高地へ往くと、もう妖婆の夢もなくなつた。そして、一行が登山の目的を達して、二萬一千呎の地點までおりて来てキャンプすると、また前回と同じやうな妖婆の夢を見た。

スマイス氏は、其の翌年になつて、同じヒマラヤ山脈中のカメットに登つたが、そこでも又二萬一千呎の地點で同じやうに妖婆の夢を見た。そして、それ以上の高地では何のこともなかつた。が、再び二萬一千呎の地點までおりて来ると、依然として妖婆の悪夢に襲はれた。

又アルプスのレックホーンと云ふ四千メートルの地點では、よく雪姫を見たと言ふ報告が傳はつてゐる。かつて辻村伊助君が此のレックホーンに登つた時、雪崩のために負傷したので、四つ這ひになつてシエワルチエックヒユツテまで辿り着いたのは夕方であつたが、其の時氷河の裂目に白衣の女が

靜に立つてゐたと云ふことである。

アルプスのマッターホーンに傳はる傳説によると、其の山の頂上にはベツカと云ふ妖怪が棲んでゐて、山の腰に眼に見えない線を曳いてゐるが、一歩でもそれを犯す者があると、頂上から石を投げて追ひ返へしたり、時には殺したりすることがあつた。

かつて伊太利と英國が競争で其の頂上を極めようとした時のことであつた。英國の登山隊が頂上に著いて見おろすと、遙か下の方で伊太利の登山隊が岩に縋りついてゐるので、先に頂上を極めたことを知らすために旗を揮つたが判らない。そこで石を投げると、石は猛烈な勢で落ちて往つたが、しばらくして見ると、伊太利の一隊は一所懸命になつて山を駆けおりてゐた。そして、其の一隊の中には負傷者まで出してゐたが、麓へ辿りつくくと、ベツカがほんたうに石を投げたと云つて報告したと云ふことである。

高尾越の怪異

多年憧れてゐた月ヶ瀬の梅を見て、其の夜は笠置の温泉にゆつくり浸ることにして、友人と二人で桃香野から高尾越にかかったのは、午後四時比のことであつた。

高尾越といふのは、登り入り降り十二丁の坂で、かなりな急坂であつた。登りの時は明るい夕陽を受けて登つたので、氣もちも明るかつたが、降りにかかつた比には、もう陽が沈んで四邊が微暗くなりかけたので、急に淋しくなつた。私は黙黙として歩いてゐる友人に何かと話しかけた。と、背後で女の笑聲が起つたので、二人は思はず振りかへつた。それは親子らしい二人の女で、一人は十七八、一人は四十恰好であつた。二人とも山畑へでも往つてゐて、歸つてくるやうな風であつた。私たちが振りかへつたのを見ると、壯い方の女は笑ひを耐へようとでもするやうに片手を口へやつた。年とつた方の女は私たちの方へちよつと頭をさげた。それは娘の不躰をあやまつてゐるやうに思はれた。

「何か面白い事でもありさうですね」

私も黙つてゐては悪いと思つたので軽く會釋した。年とつた女は莞とした。そこで私たちは歩いた。

「おい、ちよつと佳い娘だね」

「なに、あんな百姓つ子」

友人は例の梅の句に擬つてゐるらしく、對手にならなかつた、私は仕方がないので黙つて歩いた。背後の方から女の話聲が聞えてゐるが、其の話聲は私たちに關係があるやうで、私は何かしら期待す

るものがあつた。

一丁ばかり往つたところで、それまで絶えず聞えてゐた女の話聲がぱつたりやんだ。私は背後を見ようとしたところで、其の話聲が前の方に聞えた。おやと思つて夕闇にすかして眼をやつたが、其處には人の影らしいものはなかつた。そこで背後を振り向いたが、其處には其の姿は見えなかつた。私たちの歩いてゐる徑は、幅一間ばかりの山徑で、一方は斷りつたやうな崖になり、一方には谷川の流れがあるので、女たちが私たちの前へ往くためには、どうしても傍を通らなくてはならぬ。通れば當然氣づかなくてはならぬ。私は變だなどと思つて友人に話しかけようとした時、友人の方が先に口を開いた。

「おい、あの女達は、何時の間に俺たちを迫り越したんだい」

「知らない、俺も不思議に思つてるところだよ」

「變だな、他に徑はなし」

友人の言葉が終るか終らないのに、直ぐ背後で、あはははと云ふ笑聲が起つた。私たちはぎよつとして背後を振り向いた。が、其處にも人の姿は見えなかつた。すると今度は私たちの直ぐ前で笑聲がした。おやまたかと前を見たが、やはり前にも人の影がない。と、笑聲は話聲に變つてそれが直ぐ鼻の前で聞えた。いよいよ變だなどと思つてゐると、其の聲は背後へ往つた。

怪しい聲はそれから前になり後になつて、絶えず私たちにつきまといふのであつた。私たちは微鬼魅悪くなつたので足を早めた。と、其の聲の主も足を早めてゐるやうに、同じ距離を持つて聞えて来た。私たちはなまらなくなつて走りだしたが、其の聲もやつぱり私たちに歩調を合はすやうに聞えて来た。

十町ばかりも走つたところで、私達は竹藪のある處へ出た。其處を藪に沿つて曲ると笠置村の人家であつた。其處で私達は村の人らしい一人の男に出會つたので、ほつとして立ちどまつた。すると、今まで聞えてゐた例の聲がばつたり歇んだ。私たははいよいよ安心して、宿へ着き、宿の玄關で草鞋の紐を解きかけたところで、又女の笑聲がした。私たははぎよつとしたが、それは怪しい女の笑聲ではなく、私たを迎へてくれた宿の女中の笑聲であつた。(玉谷高一氏談)

雨乞祭の怪

大正十五年八月十四日のことであつた。高知縣幡多郡津大村の茅生と岩間の兩部落では、長い間旱

魃がつづいて農作物が枯死するやうになつたので、同村の白龍と云ふところで白岩神社の分靈を勧請して雨乞祭をやつた。

齋主は白岩神社の神官森義道で、副齋主は出雲大社教權少輔木戸篤太郎、舞太夫は茅生の今城判次であつた。

そして、一行が一心不乱になつて雨乞をしてゐると、午後五時比になつて、何處からともなく美しい首環のある一匹の小さな黒蛇が来て、齋場の中をぐるぐると廻り、それから茅生區長の今城柳松の膝へ来てじやれるやうにしてみたが、まもなく隣にゐる今城辰男の膝を越して何處ともなく往つてしまつた。

雨乞の人たちはひどく喜んだ。

「神様がお出ましになつた」

「雨の降る前兆だ」

果して其の翌日の夕方になつて、大雨が沛然と降つて作物が蘇生した。そこで部落民は、其處から二里ばかり上流になつた白岩神社へ往つて、お禮詣をし、それから神樂を催して神靈を慰めた。

大樽瀧の白蛇

高知縣高岡郡越知町越知の大樽の瀧の地爐が淵、其處には昔から大蛇が棲んでゐると云はれてゐた。藩政時代にも、越知町に近い佐川町の斗郷と云ふ處に住んでゐた篠原與助と云ふ郷士が大蛇を殺した事があつた。

昭和六年のこと、高知市にある稻荷教出張所の所長某君は、數名の信者を伴れて地爐が淵へ行き、其處の瀧水に打たれて荒行をして祈つてゐると、白い大蛇が淵の上へ現はれたので、それは其處の龍王權現が姿を現はしたものと云ひだした。それから越知町の元町會議員川村重義君、衛生組合長仲正藏君、元本縣巡查青木某君はじめ十數名の者が、彼の稻荷教の某君と地爐が淵へ往つて、某君の祈によつて又白い大蛇を見たと言ふ噂がたつたので、附近の町村は元より高知方面からも参拜者が押しかけた。

四月十七日になつて、前夜から龍王權現の通夜堂で通夜してゐた越知町青年訓練所の教官豫備役陸軍歩兵軍曹和下田龜秀君、川村重義君、青木某君はじめ十數名の者が、又その稻荷教の某君に伴はれて地爐が淵へ往つたが、やがて某君の祈かはじまると、白い大蛇が水の上へ姿を現はして、二三分間

位して見えなくなつた。それは二丈五六尺位ある大きな物であつた。高知市の新聞記者が和下田龜秀君を訪問して眞疑をたしかめると、和下田君は緊張して語つた。
「今日十七日の午前中、大蛇が水上へ姿を現した事は事實で、僕も確に見ました。僕は平素不信を一笑に附してをりましたが、今度と云ふ今度は、不思議でなりません。龍王權現のお姿です。随分大きかつたのです」

堀切橋の怪異

荒川放水路に架けた堀切橋、長い長いその橋は鐘淵紡績の女工が怪死した事から怪異が傳へられるやうになつた。

それを傳へる人の話によれば、その女工の怪死は、四番目におこつた怪異であるとのことであつた。

第一番目は、開橋式が済んで間もない夜の八時頃、千住の紙工場に通つてゐるお時といふ女工が、

橋の中程、ちやうど女工の怪死してゐた上の方まで往くと、霧の中から眞黒な目も鼻もない滑面の樽のやうな顔がぬつと出て、お時の顔を下から上へ撫であげた。お時は一聲叫ぶなり仰向けに顛倒つたが、やつと正氣づいて逃げ歸つて三日工場を休んだ。

第二番目は宇喜田から魚の行商に往つてゐる娘が、某夜千住へ若芽を仕入れに往つて、その歸りに橋向うの知人の家へ寄るつもりで、千住の夜店で朝顔の鉢を買ひ、それを若芽の籠へ入れて背負ひ、めつたに渡つた事のないその橋を渡らうとして、三分の一位の處まで往つたところで、どたんと言つて橋の下から飛びあがつた物があつたが、恐ろしいので見極める事もできず、そのまま逃げだす機に膝頭を打つたが、そんな事にかまつてゐられないので、夢中になつて逃げ、やつと知人の家へ往つたところで、そこのお婆さんが、

「お前さん、血ぢやないの、前掛へべつとり附いてるぢやないか、どうしたの」

といふので、驚いてみると、膝頭を斜に二寸ばかり斬られてゐた。そして、籠をおろしてみると、籠の中の朝顔に三寸位もある蟻が止まつてゐたが、斧も羽根も血だらけになつてゐた。そこでお婆さんは、

「お前さんは、蟻に斬られたぢやないの」

と云つた。その次は白晝の事であつた。三人の小娘が柳原の方から前岸へ使に往つた。その小娘の

十四になるのが鯀を一把持つてゐたが、橋の中央に往つたところで突然顛倒つて、起きた時には鯀はもう無かつた。川瀬か狐か、それにしても白晝に鯀が消えて無くなるのは不思議であつた。そして、四番目に變死したのが彼の女工で、後藤菊太郎といふ人の妻君であつた。千住署ではそれを不良の所爲ではないかと捜査を續けてゐたが、結果はどうなつたか筆者はつい聞かずにしまつた。

呪ひの繪姿

玉谷高一君の話。

私の故郷廣島縣御調郡三原町に切立神社と云ふ稻荷を祀つた社があつた。其の社は町の後方に聳えてゐる山の麓にあつて、其處へ往くには勾配の急な坂道を二町ばかりも登つて往かなければならなかつた。今では兩側に住宅が建ち並んで、軒燈も點いてゐるので、夜分でも淋しくはないが、其の比は住宅もなく、坂道の兩端には鬱蒼たる樹木が茂つてゐるので、晝でも狐や狸が出さうに思はれた。それは私が十二か十三の比であつたが、其の時某と云ふ好奇な素封家があつて其處へ別荘を建てた。

別荘の建築を請負つたのは、私の友達のKの父親であつたが、それが殆んど竣工近くなつた比私
ちは一晩其の別荘へ泊りに往つたことがあつた。

それは櫻の齋がやはらかにふくらんでゐる時分であつた。其の別荘へ仕事に來てゐる大工や左官
が、夜は仕事道具をそのままにして歸るので、用心のために交替で一人づつ残つてゐたが、其の晩に
なつてKの兄が其の番にあたつたところで、淋しいから泊りに來てくれと云ふので、ちやうど土曜
であつたし、Kを初め私たち十人ばかりの少年が出發して往つた。

Kの兄は喜んで菓子など買つてくれた。私たちは遠慮する者もないので、さんざ騒いだ結局、疲
れて床に就いたのは十一時過ぎであつた。

其の比私は、夜半比に必ず小用に往く習慣があつた。其の晩も私は例によつて眼を覺ましたが、一
人で往くのが淋しいので、傍に寝てゐるKを揺り起した。Kは私の臆病なことを知つてゐるので、便
所の前まで跟いて來てくれた。

そこで用をたしながら遣るともなしに窓の外へ眼をやつた。と、坂下の方からあがつて來る奇怪な
物の姿が見えた。私は頭へあがつて小聲でKを呼んで、二人で見た。それはどうやら女らしく、白衣
を着て頭へ燈のついた蠟燭を立て、胸には何やらきらきら光る物をかけてゐた。
二人は寢室へ引返して皆を起した。二人の話聞いたKの兄は、

「それは、丑の時詣だ、知られたらたいへんだぞ」

と云つた。私たちは平生老人から、丑の時詣の人に往きあつたが最後、其の場で殺されてしまふ。
それは參詣の容を人に見られると呪詛が利かないばかりか、却つて祈願者自身に其の咒ひが返つて來
ると云ふことを聞かされてゐたので、Kの兄の注意を受けるまでもなく、丑の時詣だと聞いただけで
小さくなつてしまつた。それでも恐いもの見たさから、またそつと縁側へ往つて雨戸の隙から眼をや
つた。

其の時女は私たちの前へ來てゐた。よく見ると、胸にかけたきらきら光る物は圓い鏡であつた。黒
いたくさんある髪の毛を後へ垂らして、顔にこつてりと白粉をつけ、そして、俊徳丸の演戲で見る女
のやうに、一本歯の足駄を履いてゐたが、蠟燭の光に照らし出された其の姿は、一目見ただけでぞつ
とするほど物凄かつた。

私たちは床へ入つてからも、容易に寝つくことができなかった。私は其の夜たうとうまんじりとも
せず夜を明した。朝になつて私たちは、Kの兄を先頭にして稻荷の社へ往つた。そして、彼方此方探
してゐると、社の横の老樹の幹に女の繪姿があつて、それに數本の釘を打ちつけてあつた。

此の話は私たちの口から傳はつて、其の日のうちに町中の評判になり、好きな連中は、夜になつて
わざわざ出かけて往つた者もあつたが、女がそれを知つたのかもう姿を見せなかつた。

後になつて判つたが、其の女は良吉と云ふ大工の女房であつた。其の女房が丑の時詣をした原因は、夫が近所の女髪結と關係して己たち親子を捨てて何處かへ往つてしまつたので、女髪結を咒つてみたところであつたが、私たちに參詣姿を見られたと云ふわけでもあるまいが、其の後其の女は肺を患つて死んでしまひ、良吉と逃げた女髪結も、間もなく旅で死んだと云ふ噂であつた。

平山婆

福岡縣嘉穂郡漆牛村に平山と云ふ處があつて、其處に坑夫の一家が住んでゐた。家族は坑夫の息子夫婦と其の両親の四人であつた。

明治末季比、其の両親夫婦、即ちお爺さんとお婆さんが、ちよつとした病氣で僅かの間に死んでしまつた。ところで、其の爺さんと婆さんが死んでから間もない時のこと、其處の息子の細君が何かの用事で壁厨を開けたが、開けるなり、

「わ」

と云つて外へ飛び出した。庭では息子が薪を割つてゐた。息子は其の聲に驚いて、

「何だ、どうしたのだ」

と云つて聞いたが、細君は眞蒼な顔をして顫へてゐるばかりで何も云はなかつた。そこで息子が又聞いた。

「おい、どうしたのだ、何かあつたのか」

「お爺さんとお婆さんがをつた」

と云つて、細君は家の中を恐ろしきうに見た。息子はばかばかしかつた。

「ばかだなあ、死んでしまつた者が、どうしてをる、神經だよ」

「神經ぢやないよ、ほんとだよ、嘘と思や往つて見るがいい」

「ばかだなあ、今の世に、そんな事があるものか」

「だつて、ほんとだよ、往つてみるがいい」

細君の物脅の顔色が治まらないので、息子はたうとう上へあがつて、細君の締め残してあつた壁厨の襖を開けた。壁厨の中にはお爺さんとお婆さんが並んで、行儀よく坐つてゐた。息子もそれにはぎよつとしたが、家長としての責任があつた。

「何か云ひたいことがあるかね、あるなら云つてもらはう、そんなことをせられては、みつともな

い

と云ふと二人の姿はばつと消えてしまつた。

夜になつて細君が蒲團を出さうと思つて壁厨を開けた。壁厨の中には晝間のとほけにお爺さんとお婆さんが坐つてゐた。細君は夫が傍にゐるので氣が強かつた。

「そんなに、何時も出てどうします、困るぢやありませんか」

細君は二人にかまはずさつさと蒲團を出さうとした。すると二人の姿は消えてしまつた。

朝になつて細君が蒲團をしまはうとして其の壁厨を開けると、また二人が其の中に坐つてゐた。

それから晝でも夜でも、壁厨を開けさへすれば、二人の坐つてゐる姿が見えたが、ただ坐つてゐるばかりで何もしなかつた。此の壁厨の怪異は、やがて村中の評判になり、村の人はそれを平山婆と呼んだ。

平山婆の噂があまり高くなつたので、息子夫婦は其處にゐられなくなつて、別の炭坑地へ引越したが、其處にも爺さんと婆さんがやはり壁厨の中に姿を見せるので、又別の家へ移つたが、其處へも爺さんと婆さんは蹤いて來た。

壁の中の女の顔

文士辻潤君は、病氣の前に壁の中から幽霊が出るゝと云つて、其の繪を置いて知人に見せた事があつたが、壁の中から出る幽霊は珍らしくなかつた。

明治三十年比のことであつた。空屋を探してゐた講師の坂本中洲、後の桃川燕林は、麻布の飯倉で好きな家を見つけた。玄關が長四疊で座敷が入疊、それに三疊の茶の間があつて、家もまだ新らしかつた。それに何よりも中洲の氣に入つたのは、家賃が壹圓五拾錢と言ふ、物價の安い當時にしても相場外れの安値である事であつた。

中洲は早速家主に交渉して其の日のうちに引越した。

引越してから三日目の夜半のことであつた。中洲がふと眼を覺ますと、長四疊の天井でみしりみしりと何人か歩いてゐるやうな音がした。おやと思ふうちに、今度は水が滴れるやうな音がした。中洲は眼を開けて其の音のする方を見つめながら、ぢつと耳をすました。

「何でせう、あれは」

傍に寝てゐた細君も眼を覺ましてゐた。

「雨でも漏つてるやうな音だが、降りだしたかな」

「さうかも知れないよ、何してもああ漏つちや仕方がない、おまへさん、ちよつと見て来ておくれよ」

中洲はしぶしぶ起きて、玄關の長四疊へ往つて見たが、雨の漏つてゐるやうな形跡もない。雨戸の隙から戸外を覗いて見ると、上天氣で空には星が一面に出てゐた。そして、不思議な物音も止んでゐた。

「どうも變だな、星が降つてるぜ」

「嫌だよ、こんな家、何處か探して越さうよ、一人ちや、辛抱ができやしない」

「まあ、さう怖がるな、幽霊の正體見たり枯尾花つてな、多分正體は鼠だらうぜ」

其の夜はそんな冗談で済んだが、其の翌晩も同じ時分に、前晩のやうに人の歩くやうな音に續いて、水の滴るやうな音がした。其の怪しい物音は其の翌晩もまた其の翌晩も續いた。それがために中洲夫妻は安眠する事ができなかつた。そこで早速空家探しをはじめたが、なかなか思ふやうな家が見つからなかつた。

越してから六日目の晩の事であつた。其の日は朝から陰鬱に曇つてゐたが、中洲が席へ出かける比から糸のやうな細い雨になつて、それがびしよびしよと降つてゐた。

中洲の細君は時どき読みさしの講談本から眼を放して柱時計を仰いだ。其の比の飯倉は、まだ狸が居ると言はれてゐた位だから、十時が過ぎると往來がなくなつて、町全體が水の底にでも沈んだやうにひっそりとなつた。

(閉場たら直ぐ歸つてもらふやうに、あれほどよく頼んでおいたから、もう歸りさうなものだ)

さう思ひながら何度目から時計を仰いだ時、門の方から下駄の音が聞えて來た。

(ありがたい、歸つた)

細君はほつとして起ちあがつたところで、入口で傘の水をきる音がして、やがてがらりと戸が開いた。

「お歸りなさい」

細君は玄關へ飛んで往つたが、玄關には何人もゐなかつた。細君はぞつとして茶の間へ引返さうとして、ふと見ると長四疊の左の方の壁に、黒い血のやうな物がべつとりと附いてゐた。はつと思つて眼を外した拍子に、縁側の欄間の壁に、何か丸い物をはめこんであるのが見えた。細君は其のまま逃げださうとしたが、見きはめないことには猶更怖いので、恐る恐るそれに眼をやつた。と、はめこんである物が不意にはつきりして人間の顔になつた。それも壯い蒼白い女の顔であつた。そして、其の頬には濡れ髪か蛇のやうに纏りついてゐた。細君は、

「きやつ」

と叫んだまま其處へ倒れてしまった。

間もなく歸つて來た中洲は、驚いて細君を助け起したが、あまりの恐ろしさに夜の明けのを待ちかねて其の家を逃げだした。

後で調べてみると、其の家の前住者の細君が何かの事情で、其の長四疊で自殺したと言ふ事が判つた。そして、血が附いてゐるやうに見えたのは、自殺した女の血飛沫がかかつたので、其處だけ塗り直してあつたと云ふ事も判つた。

結ひたての島田鬚

大震災の直後のことであつた。若山牧水の門下の青年の一人が旅に出て、越後から長野縣の野澤町へ往つた。

其處は小諸から二里ばかり離れた處で、小さな製糸工場の數多ある町であつたが、青年は其處の工

場の一つを経営してゐる某氏を歌の上で知つてゐたので、其の家へ往つて數日間滞在した。

ところで其の青年は酒徒で、毎晩酒なしにはゐられないが、主人が下戸で酒を飲まないのので、夜になるのを待つて、そつと街へ出て街の酒店で飲んで來た。

其の夜も例によつて街へ出て、一ぱい飲んで良い氣もちになつて歸つて來たところで、便所に往きなくなつた。しかし、便所へ往くには主人の變てゐる傍を通らなくてはならないが、通れば酒を飲んでゐることが知れるので、しかたなしに外へ出て、女工たちの使用してゐる便所へ往つた。

それは十一月の中旬で、月の明るい晩であつた。便所には一方に窓があつて、葉をふるつた桑畑の桑が其の前に霧か何かのかかつたやうになつてゐるのが見えた。青年はそれから其處へ蹲んでゐたところで、淋しいと云つていいか鬼氣が迫ると云つていいか、へんな不安な氣もちになつたので、後へ何か來て立つてゐるはしないかと思つて、氣にしながら後を見た。しかし、後には何もかひつたこともなかつた。

其のうち青年の頭を掠めたものがあつた。それは己が用をたしてゐるのに、すこしも音のしないと云ふことであつた。

「へんだぞ」

青年はそこで袂へ手をやつて、袂の中からマッチを出して火を點けたが、それは風のためにすぐ消

えてしまった。二本目のマッチを摺つて下の方を覗きこんだ。ぼつかりとしたマッチの火は、島田橋のやうな物をうつすらと見せながらすぐ消えた。

青年はぞつとした。しかし、はつきり物を見きよめないと気がすまないで、恐ろしいのを強ひてがまんして三本目のマッチを摺つた。其處には確に結びたての島田橋があつた。青年は轉けるやうに外へ飛び出して叫んだ。

そこで邸内が大騒ぎになり、主人はじめ数人の雇人が提燈を點けて便所へ往つた。便所の中には青年の云つたやうに結びたての島田橋があつた。しかし、それは女工の一人が妊娠したために世間體をはぢて、其處の天井へ紐をかけて縊死しようとしたが、紐が切れて下へ落ち、それで氣絶してゐたところであつた。

千足猿の鐐

大正十二年九月一日、高橋秀臣君は埼玉縣下へ遊説に往つてゐたが、突如として起つた大震災の騒

ぎに、翌二日倉皇として神田錦町の自宅へ歸つたが、四邊は一面の焼野原。やつとのことで家族の行方を捜し當たが、家族は着のみ着のまま、家財道具などは何一つ持ち出してゐなかつた。無論家費として高橋君の愛玩措かざる光廣作千匹猿の鐐も何處へ往つたか判らなかつた。

高橋君は人手に渡つたものか、それとも焼けたものか、人手に渡つてゐてくれるなら、元へ返らな

いものでもないが、焼けただれではどうにもならないと、時をり思ひだしては惜しがつてゐた。ところで翌年の九月になつて生面の人が尋ねて来て、彼の千匹猿の鐐を出すとともに、その鐐にからまる因縁話をして、名も告げずに歸つて往つた。高橋君はその因縁話を次のやうに話した。
「不思議な男は青い顔をしながらかう云ふのです、私の友人が震災の翌日、丸の内路傍でこれを拾つたが、あまり珍らしいので持つてゐると、それからと云ふものは、毎晩のやうに、幾百とも知れぬ猿が枕頭へ来て、きやつきやつと立ち騒ぐ夢を見るので、つひに神経衰弱になり、私に預かつてくれと云ふので、何氣なく預かりますと、今度は私が、毎晩猿の夢を見てうなされますので、これはつさり、鐐の祟たらうから、早速持主に返さうと云ふことになり、共箱の蓋によつて貴下の名を手がかりに、人に聞きあはしてお届けにあがりましたと云つて、名も告げないで、消えるやうに往つてしまつたよ」

子供に憑る靈

觀相家松井桂陰君の友人に米山と云ふ紳士がある。米山君は立志傳中の人で、一職工から身を起して家をなした者であるが、事業の關係から洋行して、其の歸途秩父丸の一等客に納まつてゐた。

其の時秩父丸の一等船客は、外人ばかりで、外國語の素養のない米山君は、一緒になつて運動したり話をする事ができないので、其の日も一人で食堂へ入つて酒を飲んでゐた。と、其處へガーネットと云ふハワイ生れの青年紳士が入つて來た。

其のガーネットは透視が巧くて、封をきつてない手紙を讀んだり、豫言をしたりするので人氣を博してゐた。ところで、其の日も談話室へ出てそれをやつてゐると、アメリカの一人婦人が感情を害するやうな事をした。ガーネットは非常に憤慨して食堂へ來たところであつたが、米山君を見るとつかつかと傍へ來て、

「君は感じがいいから、身の上を觀てやらう」

と云つたが、米山君にはそれが判らないので、ぼかんとしてゐると、傍にゐたコックが、

「貴下の身の上を觀てやらうと云つてゐるのですから、觀てもらひなさい、わたしが通譯をしますから」

と云ふので、身の上を觀てもらつたが、その時ガーネットは、どうして自分が透視をするやうになつたかと云ふ事を話した。それによるとガーネットは、父親がアメリカ人で、母親がインディアン。年は二十四であつた。ガーネットは兩親の許で幸福な生活をしてゐたところで、コレラか何かで兩親が突然死んでしまつたので、忽ち困つてしまつて、幾日も幾日も室の中で茫然としてゐると、某日母親の聲が耳元で聞えて、

「おまへは、一週間経つたら、ロスアンゼルスへ行くがいい」

と云つた。變だとは思つたが、他にどうする事もできないので、家財道具を賣りはらつて、ロスアンゼルスへ向つて出發したが、方角も何にも判らないので困つてゐると、其の度母親の聲がするのので、それに従つて往つた。そして、ロスアンゼルス行の汽車に乗つたが、何の驛で降りていいか判らなかつた。すると、又母親の聲で、

「此の次に、かうした驛がある。其處で降るがいい」

と云つた。そこで次の驛へ降りたが、其處から何處へ往つていいか判らない。待合室へ入つて考へてみると、又母親の聲で、

「これから二三町往くと、乗合自動車がある、それに乗るがいい」

と云つた。云はれるままに其處へ往つて乗合自動車に乗つてみると、

「此處で降りて歩くがいい」

と云ふので、其の詞に従つて降りて歩いてみると、自分の父親の家へ往つた。其處には父親の弟がゐて、兄の財産を保管してゐたが、兄が死んだのでそれを自分の所有にしようと思つて、整理をしてゐるところであつた。弟は甥が歸つて來た事であるから、どうする事もできないで、財産全部を

ガーネットに渡してくれた。ガーネットはやつと安心して其處にゐたところで、突然母親の聲で、

「日本へ往くがいい」

と云つた。で、秩父丸へ乗つたところであつた。そこで米山君は、

「日本へ往つて何をするのです」

と云ふと、ガーネットは、

「何をするか判らない、母の命令がなければ」

二

米山君は數奇な生れで、母親の事は微に知つてゐるが、父親の事は全然知らなかつた。そこで米山君は、

「父親が判らないが」

と云ふと、ガーネットは、

「君に似た人が、君の傍にゐるが、たぶんそれが君の父親だらう」

と云つた。米山君は、

「それでは、父親は何者であつたか、判らないだらうが」

と云ふと、ガーネットは今に判ると云つた。米山君は日本へ歸つてから、まづ母親の素性をはつきり知りたくなつたので、彼方此方と調べてみると、やつと母の素性を知つてゐる人に逢つた。其の人は米山君に、

「君のお母さんは、某料亭の婢をしてゐて、某男と關係して君を生んだが、其の男は日比谷附近の中學校の創立者だ、其の男には、他に四人の男の子があつたが、皆日清日露の兩役で戦死した」と云つたので、米山君は父親の創立したと云ふ中學校へ行つて、四十幾年も會計をやつてゐると云ふ

老人に逢つた。老人は米山君の顔をつくづくみて、

「これは不思議だ、貴下は此の學校を創立した大先生に生寫した」

と云つた。そこで米山君は自分の素性を話した。すると老人は、

「ちやうどよい處へ来てくださったすつた、實は大先生の家に相續する男の子がないので、財團法人組織にでもしようかと、皆で評議してみたところですよ」

と云つた。米山君は、

「今日は父の事を伺ひにまゐりましたから、いづれ又其のうちに伺ひます」

と云つて歸つて來た。其の中學校は今郊外に移轉してゐるが、米山君は其の後某行者に觀てもらふと、

「貴下にはお父さんがついてゐるが、それは貴下の教育を怠つてをつたので、申しわけがないと云ふ意味からで、別に苦にすることはない」と云はれた。

昭和十五年八月五日印刷
昭和十五年八月十日發行

春陽堂文庫 大衆文學館

〔天狗の面〕

(定價 金六拾五錢)

著者 田中貢太郎

發行者 東京市日本橋區通三丁目八番地 松浦積

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 鈴木菊藏

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

164

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地

株式會社 春陽堂書店

電話日本橋五一・一九四八・四三七三
振替口座・東京一六一七番

彌太郎	笠子母澤	寛三	風流小判	鈴木彦次郎
身代り紋三	野村胡堂	五〇	開化ちりぎり	十一谷義三郎
双影走馬燈	佐々木味津三	四〇	珊瑚重太郎	白井喬二
明麗二世相	直木三十五	六五	風雲	海音寺潮五郎
益滿休之助	直木三十五	五〇	旗本傳法	土師清二
小笠原壹岐守	佐々木味津三	四五	大阪落城	直木三十五
本朝俠客列傳	佐々木味津三	四五	浪人放浪記	邦三
國定忠治	子母澤寛	四五	銀座風俗	奥村五十嵐
隱密一代男	佐々木味津三	四〇	當世五人男	一村上浪六
源九郎義經	直木三十五	七〇	旋風時代	上中下田中貢太郎
荒木又右衛門	直木三十五	五〇	堪忍料一萬石	笹本寅吉
雪之丞變化	三上於菟吉	五〇	葉隠大名	笹本寅吉
巷談時雨双紙	村松梢風	四五	八軒長屋	村上浪六
唐人お才村松梢風	五〇		日本仇討物語	二二三千葉龜雄近刊
左門戀日記	野村胡堂	四〇		
血煙天明陣	國枝史郎	四〇		
夜明の子	佐々木味津三	五〇		

終

